奇跡への軌跡

act.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奇跡への軌跡

【Ｎコード】
Ｎ０３３０Ｏ

【作者名】
ａｃｔ．

【あらすじ】
ある世界で闇の頂点に君臨していた組織『七人会』。その組織の第二席『破軍』として活動して来た主人公。だが一つの絆の為に神を殺し、組織をも自らの手で潰した彼の行く末は遠い昔、彼の育ての母が作り上げた異世界だった。母の意志を思い出し新しい世界で『奇跡の魔法使い』として弟子の弥彦と共に生き抜く物語。

※現在、投稿を一時中断しております。
詳しくは『活動報告』に記載いたしましたので、お手数ですがお願

いします。

ａｃｔ．０００（前書き）

基本、主人公最強物です。書くにつれ、他にも強い人がわんさか出る予定です。そういった物が苦手な方は残念ですが「戻る」ボタンを押してください。

物語が煮詰まらず曖昧な部分も出て来ると思いますが、生暖かい目で見守るか、指摘してください。

それではヨロシクお願いします。

act. 000

背中に柔らかな感触が伝わる。

気持ちが良い風が肌をなで、甘い蜜の香りが鼻腔を通り抜ける。

眼はまだ開けない。

今はまだこの感覚に身を委ねていたい。

「師匠・・・そろそろ眼を開けてくれませんか？」

「・・・」

その一言で全てがぶち壊しになった気がする。

「師匠・・・目覚めているのは解っているんですからいい加減起きてください」

「・・・」

「そうですか、そうですか・・・じゃここは失礼して・・・！」

っというと少年は近くにあった岩の上に登りそこから跳躍し、未だ狸寝入りをしている青年の鳩尾めがけてキックを入れようとした。

「チッ・・・」

青年は一つ舌打ちすると、眼を開いて飛び掛ってくる少年の足を掴み、そのまま力任せに地面に叩きつけた。

「イッ！？」

ドスンッという音と共に青年は体をゆっくり起し、地面に叩きつけられた痛みでうずくまっている少年に眼を向けた。

「おいおい、人の眠りを妨げるとは良い度胸だな？」

痛そうに腰をさすりながら

「いつつ・・・寝たふりをする師匠がいけないんじゃないですか・・・」

未だに顔にあどけなさが抜けない右目が金色で、左目が銀色のオッドアイを持つ少年だった。

「はぁ～・・・まぁいいか、どうやら無事に着けたようだしな」

「あ、はい！そうですね、とても良い『世界』じゃないですか」

少年は表情をパッと明るくし、地平線まで続く花畑を見てどこか思いを馳せていた。

「じゃ早速だが弥彦（やひこ）行こうか・・・」

「はい、師匠！・・・ってどこに行くかはもう決まっているんですか？」

そういうと、青年は一つ頷いて「ああ・・・」と一つ返事をした。

「それなら良かったです！久しぶりに食事を取りたいですね～！あ、あとデザートなんかも食べたいです！早く行きましょう！」

そう言うと弥彦は小走りに先を行き、「師匠、早くー！」と叫び青年に手を振った。

「まずは、あの人に会いに行かないと・・・な・・・」

青年はそう呟くと空を見上げた。

神々しく輝く太陽。逆光で表情は伺えない。

「Ｈｅｌｌｏ　Ｗｏｒｌｄ」

その言葉は風に流れ『世界』に伝わった。

そして最初の一歩を踏み始めた。

――――おかえり・・・・。

ａｃｔ．０００（後書き）

ご感想、ご意見お待ちしております。

ａｃｔ．００１（前書き）

書物を読むのは物凄く好きです。ですが口下手な為、表現がヘタクソだからもっと書物を読め！と良く怒られます。

act. 001

「師匠・・・本当にこの道であっていますか？」

弥彦がそう問いかけるのも無理は無かった。

真上にあった太陽が地平線に半分ぐらい沈みかけた頃、彼らは未だに歩いていた。

「いい加減疲れましたよ・・・」

「我侭言うな！」

「だって～・・・これじゃ来た『世界』は正解だけど、辿り着いた場所はハズレじゃないですか」

全くもってその通りだった。

「まぁ落ち着け、人が居る場所には確実には近づいているから」

そう青年が言うとパッと笑顔に花を咲かせ弥彦は凄い勢いで詰め寄り、

「あとどれくらいですか？！」

「このままぶっ通しで歩いたとして、明日の朝ぐらいかな～」

「え～？！」

一気に肩を落とし、この世の終りのような表情を浮かべた。

「コロコロ表情を変えて、忙しい奴だなぁ～おまえは・・・ほら歩く！」

「うぅぅ・・・鬼だ・・・」

今にも泣きそうな表情を浮かべながらでも歩みは止めない弥彦を見て、青年は苦笑いし先を歩いていた。

「ところで師匠？」

「ん？なんだ？」

「なんでこの『世界』に来たんですか？」

弥彦が問いかけるのも無理はなかった。

背は高いが、お世辞にも体つきは良いとは言えないながらも、弥彦は彼がその身に宿した力を使えば幾多の世界を渡る事は可能な事は知っている。

だが、数多ある世界の中で青年は予めこの世界を目指して力を行使した。

弥彦はただ純粋にその疑問を青年にぶつけていた。

「ん～そうだな・・・知り合いに会いに来たんだ」

「知り合い？」

「ぁあ、昔世話になった人だ。お前も知っている人だぞ？」

「え？　そうなんですか？」

「ああ、誰かは会ってのお楽しみにしておこうか」

青年が意地悪な顔を浮かべると弥彦は「けち～」と言いながらも、「誰だろう？」と嬉しそうな表情を浮かべつつ青年の後を追った。

それから二人は野宿をしつつ夜が明けるまで休息取り眠りについた。

そして明るくなったのを見計らい目的地の街を目指しまた歩みを進めたが、弥彦は辺りを見回しつつ慎重に青年の後を付いて歩いていた。

「どうかしたか、弥彦？」

「なんか見られているような気がして落ち着きません」

「気づけているなら上出来だな」

「え、やっぱり監視されていますか？」

「ああ・・・何かあった時の為にいつでも動けるようにしておけ、ただキョロキョロしすぎるなよ？」

「わかりました」

だが、明らかに弥彦の表情が真剣な物に変わったのを見て青年は「まだまだ修行が必要だな～」と苦笑いを浮かべるのだった。

監視の目がある中、二人は歩く事は止めずに目的の街に向かって歩いていた。

街に近づくにつれて視線は厳しくなり、弥彦は疲れた表情を浮かべていた。

「師匠・・・いい加減もう疲れました・・・なんですかこの鬱陶しい視線は・・・」

「気にするなって言っても無理なんだろうな」

「だってずっとなんですよ！」

弥彦は噛みつかんばかりに青年に詰め寄った。

「まぁまぁそろそろ街にも着くし、それにあちらからやっと来てくれたぞ」

そう言うと青年は弥彦の背後に向かって指を刺した。

「えっ？」

釣られて振り返ると、遠くから馬に乗った3人が近づいてくるのが見えた。

中心に白い馬に乗った女、両脇には黒い馬に乗った二人は男だった。

「弥彦、オレの後ろに・・・」

その言葉を耳にした弥彦は一つ頷いて青年の斜め後ろに立ち、遠くから来る者を二人で待った。

act. 001（後書き）

ご意見ご感想、お待ちしております。

act. 002（前書き）

本を読むことの他に、ギャンブル（スロット）が物凄く好きです。この小説はギャンブルを辞める為の一環として書いてます。目指せ！脱ギャンブル！

act. 002

「何者だ！　返答によっては痛い目を見るぞ」

敵意むき出しに、その言葉を最初に発したのは3人組の一人、まだあどけなさが抜け切らない女性だった。

白の鎧を身に纏い、片手には槍を携え、白馬に乗っている姿はまさしく・・・。

「さながら白馬の王子様ならぬ白馬の王女様だな」

と聞こえないように呟いたつもりだったが

「なんだと?!」

しっかり聞こえていたらしい。

「無礼者め、名をなのれ！」

槍の矛先をこちらに向け、まくし立てるように彼女は言った。

それに続いて両脇に居た男達も剣を抜くと同時に二人を囲み、いつでも襲いかかれるよう態勢を取っていた。

「ちょ、ちょっと待ってください！」

慌てて青年は弁明しようと頭をフル回転させた。

「俺達は旅の途中でここ近くにある街に寄ろうとしただけで、決して怪しい物では・・・」

そう青年が言った瞬間、二人を囲む3人の口の端が釣り上がるのを見て、失敗を悟った。

「バカめ！　自ら墓穴を掘るような事をいいおって・・・我が王国とマクサス神聖帝国とが戦時下にあり国境と街を一時封鎖しているのは赤子でも知っている事だ！」

まさか戦争中だと知らなかった青年は驚きの表情を隠せないで居た。

と同時に自分の安直な考えに内心、舌打ちをした。

「うわ～その言葉は無茶苦茶怪しいですよ師匠・・・」と軽蔑の眼差しを弥彦に向けられていた。

女騎士を見上げると勝ち誇った顔でこちらを見下ろし、癪に障るその顔を見てますます苛立ちを覚えたが、目の前の三人は（特に女騎士）は逃がす気は無いという意思が目に見えて感じ取れた。

不安を抱えた弥彦は慌てて女騎士と青年を交互に見て、青年に縋り始めた。

「し、師匠～？」

「安心しろ、大丈『バッカス、ダン引き捉えろ！』・・・」

不安げにこちらを見つめる弥彦を落ち着かせようとしたが、別の言葉に遮られた。

バッカス、ダンと呼ばれた二人の男騎士は馬から降り、無精髭を生やし長身のバッカスが捕縛しようと近づき、右頬に大きな傷跡があるダンが後ろで剣を構え待機していた。

この現状を打破しようと青年はギリギリまで頭を回転させ、仕方無く本来の目的を告げることにした。

「まってくれ！」

その声に騎士達は一斉に驚き、慌てて武器を構えなおした。

青年は両手を上げ敵意が無いことを示しつつ言葉を続けた。

「嘘をついていたのは謝る。だが、オレはある人に会いに来たんだ」

「ある人だと？」

女騎士が問い返した。

「そうだ、アエリア王国現女王にして『創生の魔女』の一人、雫様

に」

弥彦も含め、騎士達に動揺の色が一瞬広がった。

「その証拠に、謁見を許される者に与えられる『光の宝玉』も持っている」

青年は慎重に持っていた大きめの袋を地面に下ろし、片手は上げたまま、もう片方の手で袋をあさり目的の物をゆっくり取り出した。

それは１２面体にカッティングされた黒い石だった。

「これは今の段階ではただの黒い石だが、特定の場所でこの石を砕いた場合本来の姿に戻る仕掛けになっている。騎士殿ならこの意思の意味をわかってくださるはずですが・・・」

そう言い再度、女騎士を見上げると表情は憤怒に溢れかえっていた。

女騎士が手綱を一気に引き上げ、馬を二本足立ちさせ、

「光の宝玉だと?！　笑わせるな、そんな名前聞いた時も無いわ！」

馬の前足が地面に戻る反動を利用して突然、槍の突きを放ってきた。

それはまさしく、一種の到達点に辿り着いた者だけが放てる神速の突き。

「っ！」

咄嗟に弥彦を抱きかかえ避けたが、足の太ももをかすめ浅い傷を作

っていた。

「バッカス、ダン、もう良いこの場で処断するぞ」

怒りをそのまま言葉にし、部下である二人に指示を出した。

それに意義を唱えようとしたのはバッカスだった。

「しかし、あねさん・・・これは・・・」

「うるさい、口答えするのか？」

有無を言わせぬその様にバカッスは黙るしかなかった。

「すまねぇな、あねさんは本当は良い人なんだが、女王様の事になると血が上りやすくてな・・・信仰に近い感情を抱いているんだわ。
　しかも如何にも怪しい身なりをしたあんた達が名前を出した時点で・・・」

「そういう事か・・・」

今一納得できない部分もあったが、本当に申し訳無さそうに言うバッカスを見て青年は軽く頭を抱えたくなった。

「そういう事であんちゃん、悪いが死んでもらうぞ。　苦しまないようにするからな・・・」

バッカスがそう言うと、一気に殺気が膨れ上がった。
弥彦は「あわわ！師匠・・・」と慌てふためいて不安げに見つめてきた。
「こうなっては仕方が無い、弥彦さが・・・」
下がって隠れていろ。と言いかけたが、とうの弥彦は青年の言葉を半分だけ聞きすでに離れた場所に避難し始めていた。
青年は離れる弥彦を見て一つ溜息をつき、今にも襲い掛かろうとしている三人を見据えた。
「悪いが、こちらにも行かねばならない理由がある。　ここで死ぬわけにはいかないんだ」
「だろうな・・・」
バッカスが一つ頷き、また一瞬だけいたたまれない表情を浮かべていた。
それを見た青年は「やれやれ・・・」と呟き、戦闘が始まった。

ａｃｔ．００２（後書き）

ご感想、ご意見お待ちしております。

ａｃｔ．００３（前書き）

サブタイトルを間違えている事に今更気が付いたという・・・。慌てて直したはずなのに何故か直らない？！タイムラグあるのかな？

act. 003

最初に動いたのはバッカスだった。

長身にして筋肉質な体つきからは想像できないほどの速さ、そしてほぼ予備動作無しの動きを見せられ青年はめんくらった。

一瞬で青年との間合いを詰めハルバードで胴を薙いで来た。

青年はバックステップで回避を試みたが腹を皮一枚斬り付けられていた。

「大げさに避けたつもりだったが、これは・・・」

「あんちゃんやるじゃねぇか・・・」

不適に笑みを浮かべるバッカスを見て認識を改められた。

が、思考にふけるのも一瞬、頭上から殺気が襲い掛かり、見上げる間もなく青年は横に回避行動を取った。

「ほむ、勘が良いみたいですね・・・見上げず私の攻撃を避けるとは・・・」

元々立っていた位置に目を向けると、５本の矢が小さな陥没をそれぞれ作り刺さっていた。

それを作った張本人のダンは素晴らしいと言わんばかりに眼光を鋭くさせた。

女騎士もさる事ながら、この二人も強い！

青年は舌打ちをしつつ、ジリジリと後退しつつ相手の出方を伺おうとしたその矢先に背後から不意に声がかかった。

「あんちゃん、俺たちの出方を伺うつもりかもしれんがそれは悪手だな！」

目の前に居たはずのバッカスが突如背後から襲いかかってきた。

「なっ！？」

まともな声もあげれず、迫るは鋭利なハルバードの槍先。

女騎士と同等かそれ以上の速さで迫る突きの攻撃を体ごと回転させ受け流すつもりだったが、ハルバードは軌道を変え横に薙いできた。

ドゴッ！！

っという音と共に青年はバッカスが薙いだハルバードの柄が腹部に当たり見事に吹き飛ばされた。

そして追撃とばかりにダンが青年にめがけて渾身の一矢を飛ばした。

ドーーーン！！

衝撃波が周囲に広がり弥彦をも飲み込み、当たり一面には先ほどとは比べ物になら無いくらいの大きさの陥没を地面に作り上げていた。

砂埃が舞う場所をダンは見つめながら隣に居るバッカスに問いかけた。

「終りましたかね？」

「いや、終っていない」

バッカスは武器を構えなおし未だに舞う砂埃に向かって槍を薙ぎ、視界を晴れさせた。

「むぅ・・・なかなか頑丈ですね」

ダンが感嘆の息を漏らした。

服はボロボロだったが、致命的なダメージは与えられなかったようで青年は陥没した地面の中心で二人を見上げていた。

「し、師匠〜〜！」

弥彦が陥没した地面の近くまで走り寄り、青年の無事を確かめていた。

「オレは大丈夫だ、弥彦、怪我は無いか？」

「はい、なんとか！」

ボロボロになった服に付いた埃を払いつつ弥彦の無事を確認すると、ホットした表情を浮かべ、バッカスとダンを再び視界に捕らえた。

「離れていろ。これからちょっと本気を出す」

青年がそう言ったのを確認すると弥彦はまたトテトテと走り距離を置きつつ「フレーフレー！し・しょ・う！！」と一生懸命応援し始めたのだった。

「強いな。本当にあんた達は強いよ」

青年の素直な賞賛に返答したのはバッカスだった。

「オレなんてまだまださ・・・あんちゃんこそ、まだまだ余力はありそうだな？」

「ぁあ、これからちょっと本気で行く。下手に動いて死なないでくれよ？」

「はっ、言ってろ！」

バッカスは青年の言葉を軽くいなしながら、ダンだけに言葉が聞こえるよう小さな声で呟いた。

「ダン、本気でやるぞ・・・」

ダンは一つ頷き、それを皮切りに再び戦闘が始まった。

先に動いたのはまたもやバッカスだった。

「はっ！ふんっ！どぅりゃー！」

真っ先に突進してくると思いきや、バッカスはその場でハルバードを何度か虚空に向かって全力で薙いだ。

その結果生じたのが、幾重にも重なる真空波だった。

不可視の刃を感覚的に青年は捕らえ、鮮やかに回避していく様子を見てバッカスは驚いた。

「おいおい、結構本気の技だったんだが？」

「殺気が篭ってなければ例え『武神』と呼ばれる存在でも回避は不可能だったろうさ」

「なるほど！」

青年の言葉に納得したのかバッカスが、にんまりと笑みを浮かべた。

「こちらも忘れて貰っては困りますよ？」

と不意に背後から殺気が襲いかかった。

考えるより先に体が動いた・・・というのが正しい表現だろうか？

頭上から襲い掛かる剣先を青年は咄嗟に体を横にずらしかわし、ダンの顔面めがけて裏拳をかました。

ゴッ！

鈍い音と共にダンがよろめき、青年は追撃とばかりに回し蹴りを腹部にお見舞いした。

「うっ・・・」

そんなうめき声と共に不意にダンが消え、バッカスの方に視線を向けるとダンが肩膝をついて苦悶の表情を浮かべていた。

そして青年は二人に向けて言った。

「二度も同じ技は喰らうはずないだろう？」

「っ・・・」

忌々しげに見詰めるダンを見返し青年は二人に向け言葉を続けた。

「遠近攻撃を両方扱え、それを状況によって交互に使い分けるあたり、あんたら二人の連携は素晴らしい物があるが俺に言わせればまだまだだな」

バッカスとダンは数十年来の付き合いだけに二人で幾多の戦場を駆け、共に死線を潜り抜けて来ただけに自分達を越える連携を見せる仲間はこの世には存在しないと思っていた。

「ほう？どこがダメなんだい？」

「未知の敵へ・・・オレよりも用心し過ぎだな・・・そもそもこの戦いに乗り気じゃないんだろ？」

確信を突かれたのか二人とも何も言わなかった。

そして青年は言葉を続けた。

「じゃ～そろそろオレから行こうか」

「？！」

誰かの息を呑む音が聞こえた。

青年が不意に虚空に向かい拳を横に薙いだ。

――――ガン・・・！

そんな音と共に空間に亀裂が生じ、その亀裂に青年は手を入れ一本の黒い刀を一本取り出し振るった。

「避けろよ？」

その言葉と同時に、バッカスとダンの頬を微風が撫でた。

直後、微風は突風に変わり、そして目で確認できるほどの巨大な真空波が二人を襲った。

「「なっ？！」

考える前に二人は別々の方向に飛び真空波を避けた。

「なんていう・・・化け物だ・・・」

ダンが先ほどまで居た場所と青年の両方を見て、未だに信じられないといった表情を浮かべた。

地面は物の見事に真空波によって切り裂かれ、地中の奥深くまでえぐられていた。

そこに予想打にしない言葉が入って来た。

「バッカス！ダン！そこを動くな！今手当てをする」

二人は背後に視線を向けると、隊長が慌てて駈け寄ってきていた。

先ほどの真空波は2人だけではなく、後ろに居た隊長までをも巻き込んでいた事実にさらに愕然とした。

バッカスは不意に疑問に思った事を口にした。

「ん・・・？手当てですかぃ？」

「そうだ！そこを動くな！」

血相を変えて向かってくる隊長を安心させようとバッカスは立ち上がろうとしたが、それは強烈な痛みが阻止した。

「オレ達はどこも怪我を・・・ぐぅうう？！」

「なっ・・・うぁああ！」

バッカスとダンはここで初めて己の体の状態を把握した。

バッカスは右手首と右膝から下、ダンは左肘と左膝から下が無くなっていた。

そして二人は同じ事を思った。

――――避け切れなかっただとぉお?!

そんな三人のやり取りを追撃するわけでもなく、青年は無表情な顔で見ていた。

ａｃｔ．００３（後書き）

よく戦闘シーンの描写が難しいと他の作家さん達が言ってますが、こうして書くことでその意味をようやく理解出来ました。

ご意見、ご感想お待ちしております。

ａｎｏｔｈｅｒ．０００（前書き）

この物語は主人公視点？（ａｃｔ．＊＊＊）。他視点（ａｎｏｔｈｅｒ．＊＊＊）。過去（ｍｅｍｏｒｙ．＊＊＊）のサブタイトルを３つに別けて書いていくつもりです。既にそういう風に書き貯めてしまった・・・。全ては一つに繋がる！はず。

another. 000

とある一室に女性が二人居た。

片方は煌びやかな装飾を身に纏い、椅子の肘掛に肘を置き、頬杖をついてただ外を眺め、未だどこか顔にあどけなさを残す女性。

そしてもう片方は白の鎧をその身に纏い、白髪、白肌と髪の毛の先からつま先まで白で統一されたような女騎士であった。

だが、右肩に国の紋章である七色で染められた片翼が、白に染まりあがった彼女の存在を汚しているように思えた。

最初に声を発したのは女騎士であった。

「女王陛下・・・北門より５０ｋｍ離れた位置で、私の部下が正体不明の敵と交戦を始めたようです」

外に向けた視線は外さずに厳かな声で女王陛下と呼ばれた女性は返答した。

「そうか・・・で、どこの者か判明しましたか？」

「いえ、未だに不明です。ただ・・・」

女騎士が言葉を一旦切り、改めて報告を続けた。

「かの者ですが、どういう意味かはこれまた不明ですが１２面体の

黒い石を持ち、女王陛下にお会いしたいと願い出ているようです」

それを聞いた途端、女王は不意に立ち上がり言葉を発した。

「戦闘は中止だ！その者を私の元へ連れてまいれ！」

突然、声を荒げて命令する女王に呆気に取られ女騎士は一瞬我を忘れかかった。

「・・・」

「聞こえなかった？」

「いえ、しかしかの者は・・・」

そこまで続けて言葉は遮られた。

「あなたはいつから私に同じ事を二度も三度も言わせるほど偉くなりました？」

女王から発せられる怒気が不意に膨れ上がり、女騎士は慌てて方膝をつき

「直ちに・・・」

頭を垂れ、女王の意思に従った。

女騎士が退室したのを確認し、女王は一人思いを馳せていた。

「もし彼だとしたら、先に逝かれましたか・・・姉上・・・」

その呟きは誰にも聞かれること無く風に流れた。

そして、女王の頬には一筋の涙が流れ落ちていた。

――――姉上・・・。

「いつか私が死に、私の息子がお前の元を尋ねるだろう・・・それまでこの世界を頼むよ、雫」

その言葉を最後に姉と別れ数百年が経った。

その約束を守る為だけに生きてきたと言っても過言ではない。

「ようやく私の役目も終るか・・・」

再びそう呟き、新たな未来へ女王の思いは膨れ上がっていた。

ａｎｏｔｈｅｒ．０００（後書き）

明日からタバコの値段が上がる！

ご意見、ご感想お待ちしております。

act．004（前書き）

モツ鍋が食いたい季節になってきましたね・・・。いや、キムチ鍋が良いかな！

act. 004

「二人ともしっかりしろ！今回復の魔法を使う！」

「「・・・ッッッ！」」

声にならない悲鳴を上げ、二人は必死に激痛に耐えていた。

バッカスとダンは気絶しようにも痛みが勝り気絶する事ができず、我を忘れて痛みに耐えていた。

女騎士の両手が白く光り、バッカスとダンに向け手をかざすと二人は白い光に包まれ徐々に止血されつつあった。

そしてようやく流れ出していた血が止まりホッと溜息がでかかった頃、不意に背後から声がかかった。

「おい、戦闘中なのを忘れてないか？」

三人がハッと息を呑み、背後にたたずむ青年を見て己の過ちにようやく気がついたのだった。

「馬鹿だろ？おまえら」

青年がケラケラと笑う。

「何で忘れられるんだよ！」

笑いじゃ留まらず、爆笑の域に達していた。

「止めだやめだ！」

アホらしいとばかりに青年は黒い刀を空中に投げ捨て、刀は空中で霧散し形を消した。

そんな青年の笑う姿を見てバッカスとダンは緊張の糸が切れたのか、ようやく意識を失う事ができた。

不意に意識を失う二人を見て女騎士は慌てたが、静かな寝息を漏らしている二人を見て安堵し、立ち上がって青年を再び正眼に見据えた。

「どうして、襲ってこなかった？」

「元々殺し合いをするつもりはなかったしな」

「バカな？！二人にこんな傷まで負わせて、そんなつもりはなかっただと？！」

「ぁあ・・・第一、お前が最初に突っかかってきたんじゃないか・・・オレは被害者！そしてそこで寝ている二人もお前のせいで怪我をしたんじゃないか？」

「う・・・」

二人なら大丈夫だろうと高をくくっていた為、予想打にしないこの結末は全て自分の責任であると気が付き女騎士は押し黙った。

「それに・・・」

と青年が言葉を発し、続けた。

「三人・・・いや四人か・・・何を勘違いしてるんだ？」

「えっ？」

気の抜けた声が女騎士から発せられたが、それに突っ込む事はせず青年は言葉を続けた。

「いやだから、何でわざわざ『怪我の手当てをしているのか？』と聞いているんだが・・・」

と青年は静かな寝息を立てている二人に指を刺し、それに釣られて女騎士は視線を二人に向け目を疑った。

「どこも怪我をしていないし、失ってもいないだろ？」

「なっ・・・何故！！」

そこには二人が失ったはずの腕や手、脚がしっかりと残っていた・・・。

愕然とする女騎士を尻目に、気の抜けた声が木霊した。

「ししょ〜〜〜やりましたねー！」

「弥彦、無事だったか」

ホッとする青年を見て、弥彦は「もちろんです！」と元気一杯な声で返した。

「でも、本当に凄いですね！ボクにもあの二人の手足がなくなったように見えましたよ！」

興奮が冷めないのか弥彦は鼻息を荒くして青年に言い続けた。

「どんな魔法ですか？ボクにも使えますか？ってか、ボクも師匠みたいになれますか？！」

「おいおい、そんなに続けて聞くな・・・それに最後のはお前の努力次第だといつも言っているだろぅ？」

そう言いつつ青年は弥彦の頭をグリグリと強めに撫で、弥彦を黙らせた。

「な・・・だ・・・」

弥彦に気を取られ、女騎士の言葉を聞き逃した青年は「ん？」と問いかけた。

「なんなんだ・・・一体何が起こったというのだ・・・」

未だ目の前で起きている事が信じられないのか女騎士は言葉を続けた。

「どんな魔法だ・・・いや、そもそも魔法なのか・・・」

「あちゃ～～」と弥彦は女騎士の様子を可哀想な眼差しを向けていた。

―――ゴンッ！

「弥彦・・・」

と拳骨を落し一つ低いトーンの声で弥彦を注意しつつ、女騎士に近寄った。

「どうする？続きをやるか？」

いつでも自分の大切な部下を失う覚悟はできていた。

だが、覚悟はできていても実際それが起こるとパニックになるのがどこの世界でも普通だった。

それが長年自分を支え続けた大切な部下だったら尚更・・・。
だがその焦りはどこの誰ともわからぬ男によって作られ、そして仇を討とうにも失うはずだった部下は健在だった為に恨みの感情は霧散し、なんとも言えない心情が女騎士を支配していた。

「できない・・・もうお前に刃を向ける事は出来ない・・・」

「そうか、なら良い」

青年は弥彦に向き直り「じゃまた街を目指そうか」と言いかけた時に、それは襲い掛かった。

「くっ・・・まだ来るかよ・・・！」

それは先ほどまで戦っていた三人より強大なプレッシャーだった。
そのプレッシャーに感づいたのか弥彦は無意識に青年の袖を掴み、遠くから来るプレッシャーを与え続ける者の姿を見据えていた。

「やれやれ・・・前途多難だな・・・これは・・・」

一つの溜息を漏らし、青年は憂鬱な気分になった。

ａｃｔ．００４（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

act. 005（前書き）

1週間以上の間を空けないよう投稿していこうと思います。頑張ります。

act. 005

「男！名を名のれ！」

何の前触れもなく、突然、後からやって来た女騎士は言った。

それは先ほどまで戦っていた女騎士と同じ白色の鎧を身に纏い、髪や肌その全てが白で統一された女性だった。

だが国家の紋章であろうか？

右肩にある七色に輝く片翼の紋章が白を台無しにしているような気がした。

有無を言わせぬ威圧を、青年は受け流し返答した。

「おいおい、この世界では礼儀と言う物は存在しないのか？」

一瞬、女騎士を囲むフルアーマーを身に纏う騎士達から怒気のような物が発せられたがそれを無視して、青年は言葉を続けた。

「普通は自分の名を言ってからが礼儀というものじゃないか？それを頭ごなしに言って誰もが土下座して言うと思ったら大間違いだ！部下の見本であるべき者がそれを無くしてどうする？」

挑発とも取れる青年の発言に周囲は怒り心頭だったが、女騎士はど

こか納得する部分があったのか「ぬぅ・・・これは失礼した」と女騎士は馬から降り、それに続いて渋々他の部下も馬から降りた。

「私はアエリア王国七騎士が一人にして白薔薇近衛騎士団団長マリア・アークスという。そこに屁垂れ込んでいるのは、我が妹アリサ・アークスだ」

――――よく噛まずに・・・。

と青年は心の中で思った。

そして、未だに先ほどの現象から抜け出せないアリサを尻目にマリアは言葉を続けた。

「我が妹が大変失礼な事をしたようだな、申し訳ない」

突然、頭を下げる上司の姿を見て周囲の騎士は慌てたがそれも直ぐに収まった。

「して、そなたの名は？」

「やっとまともに話が通じる人にあったな・・・たぶん無意識なんだろうが、出来れば俺たちに与えているプレッシャーを解いてもらいたんだけど？」

「これは失礼した」

その言葉と同時に二人に襲っていた圧力は一瞬にして解け、弥彦はホッと息をついていた。

「オレはわけ合って今は名を名のれない。だがアエリア王国の現女王陛下にして『創生の魔女』の一人、雫様に会いに来た。昔、この石を見せれば無条件に会えると聞いてやってきたがどうやらその話は正式に伝わっておらず、自衛の為にここで戦闘を行った」

懐から１２面体の黒い石をマリアに見せた。

「ああ、大体の事情はこちらでも把握している。こちらの不手際によって大変申し訳ないことをした。女王陛下直々に貴殿に会いたがっている」

「そうか、では案内をつけてもらえるのかな？」

「ああ、では共に行こう・・・案内をする。馬をこちらに！」

マリアやアリサの乗っていた白馬とは一転して、立派な黒馬がやってきた。

「弥彦、乗れそうか？」

「一人では厳しいです・・・」

弥彦は黒馬を見上げて、小難しそうな顔を浮かべていた。

そんな弥彦を見て青年は先に黒馬に乗り、弥彦に向かって手を差し伸べた。

「ほら、手を貸すからおいで・・・」

「ありがとうございます！」

青年の手を掴み、手を引かれる反動を利用して弥彦が黒馬に乗る姿をマリアは微笑ましい笑顔で見ていた。

そして我に返って

「アリサ！いつまで呆けている！行くぞ！」

「ア・・・・は、はい！お姉さま！」

ピョンッと飛び上がり、慌てて背を正すが彼女は思った疑問をそのまま言葉にした。

「あ、あれ？なんでお姉さまがここに？」

「馬鹿者、バッカスとダンを連れて王城に戻るぞ」

「はい、わかりました！」

疑問を残したまま未だに眠るバッカスとダンを他の騎士に任せ馬に乗ったが、先ほどまで戦っていた青年も何故か黒馬に乗っており疑問は深まるばかりだった。

が、何故？と問いかける事は彼女が敬愛する姉にさらに雷を落すことになりそうだったので言葉にはしなかった。

「では、王城に戻るぞ！」

その一声で騎士が一斉に前進し始めた。

「やっと目的地へ行けますね、師匠！」

「ああ、本当にやっとだ・・・。やっとあの人に会える」

そしてようやく物語が始まるのであった。

ａｃｔ．００５（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

ａｃｔ．００６（前書き）

カップ焼きソバをお湯と一緒に排水溝に流した時の悲しみは異常・・・。

act. 006

――――プリズムアーク。

それはこの世界の名前と同時に、世界最大の都市の名前でもあった。

その都市はアエリア王国の首都とて機能し日々賑わいを見せ、都市の周囲を十メートルからなる高い城壁が囲み、東西南北四つの巨大な門がそびえていた。

日々活気を見せる都市だが、観光名所としても有名であった。

都市の上空に浮遊する八つの城。

都市の中心に浮遊する一番大きな城を王城とし、それを取り囲み守護するかのように浮遊するそれぞれ赤、橙、黄、緑、青、藍、そして紫のオーラを放つ七つの城があった。

その七つの城を管理するのが世界にその名を轟かせる《七騎士》。

それぞれが王国の軍事や政治に精通し、重要なポストを収めていた。

その一角を収めているのが、今、隣を気丈な姿で馬に揺られているマリア・アークスだった。

そしてその七つの城に囲まれた王城は白色の輝きを放っていた。

「マリアさんは『白』の所属では無いのですか？」

と青年は隣を一緒に馬に跨って歩くマリアに尋ねた。

「マリアと呼び捨てで構いませんよ？」

気にした様子もなくそう言うマリアを見て青年は

「えーっと・・・ま、マリア？」

と軽く語尾がうわずってしまい、それを聞いていた弥彦が「師匠・・・プププ・・・」と笑いを堪えるのに必死そうだった。

「はい、私は本来『藍』の所属なのですが、女王陛下に認められ新設したばかりの部隊の騎士団長として配属される事が決まりました」

「へぇ～じゃそれで『白』の名を使っているんですね」

「そうですね。現在、引継ぎ作業や新しい部隊員の訓練で色々と追われていましてね」

「あはは、でも最高名誉な分頑張らないとですね」

「ええ、とても充実しています。来週には正式に『藍』を後任の者に任せ『白』に異動が完了します」

顔を少し赤くして照れ隠ししながら笑うマリアを見て、青年は「綺麗だなァ～」と聞こえないように呟いた。

「そうですねぇ～」

と弥彦にはしっかり聞こえていたらしい・・・。

「しかし、随分お詳しいご様子。何度か来られた時があるのですか？」

「ええ、昔一度だけこの街に来た時があります」

「そうですか、では随分街の様子が変わって驚かれているのでは？」

青年はその問いに一つ頷き、遠い昔に思いを馳せた。

それから世間話をしつつ街の様子を眺め、ようやく待ちに待った言葉がマリアから発せられた。

「そろそろ王城の入り口に着きます」

その一声で青年や弥彦、そして他の騎士達も身を正した。

「女王陛下のご客人をお連れした。門を開けてくれないか？」

マリアが門番に一声かけると門番は「は、直ちに！」と勢いよく敬礼し「門をあけろーーー！」と大声で叫んだ。

―――ゴゴゴッ。

鈍く渋い音を立てながら、最初に通った門より少し大きめの門がゆっくりと開き始めた。

そして門が半分くらいまで開いたとき、青年と弥彦は声を漏らした。

「「あ・・・」」

門の奥に目を凝らして見ると、そこには一人の女性が立っていた。

決して華やかではない衣装。

それは女性の放つオーラによって見劣りするだけの話だった。

どこかあどけなさの残る顔。
それは彼女が青年との約束を守っているという証拠。

「待ちかねましたよ・・・お久しぶりですね、灯馬(とうま)・・・」
その声を聞いた青年は慌てて馬を降り、腰から折れるように頭を下げて
「お久しぶりです、雫叔母さん」
青年は頭を上げ、久しぶりに再会する人物に最高の笑顔を見せた。
それに釣られてか、雫叔母さんと呼ばれた女性も最高の笑顔を見せたのであった。

ａｃｔ．００６（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

memory. 000（前書き）

月3日の休みってどう？と聞いてみる・・・orz

memory. 000

「お姉上、どうやらこの街に生存者はいらっしゃいません」

頭まですっぽり覆う白いローブを身に纏いその一人は言った。

その声からするに、容易に女性だと判断できた。

「そうですか・・・」

そう答えたのは黒いローブを身にまとう女性。

フードを頭から外し、とても綺麗な顔立ちであったが影を落としていた。

「しかし姉上、これは本当に誰かが一人でやられたのですか?」

「ええ、間違いありませんよ」

「・・・」

何度聞いても同じ答えが返ってくるこの状態に、未だ顔を見せない白いローブの者は押し黙った。

何度もそれを問うには理由があった。

数時間前まで二人が立つ場所は人口２５０万人からなる大都市だった。

それが一瞬にして地平線まで続く瓦礫と死体が支配する土地に変貌した。

調べられる限りで調べたが生存者は皆無。

所々から未だ呻き声のようなものは聞こえるが、それは生存者ではなく『元々それであったもの』が形を変えたものだった。

―――亡霊。

その言葉が一番合うだろうか？

己の死をまだ理解する事さえままならず、彼らは普通の生活を営んでいるんだろう・・・。

自分達の存在が異端に思えてくる場所でもあった。

「姉上、ここに長く居ては体に障ります。離れましょう・・・そろそろ国軍がやってくる頃ですから・・・」

「そうですね。しかし、誰が・・・」

もう一度この惨劇を見ようと振り返る。

魔力の暴走？

または別の力？

自問自答を幾らしてもその答え見つからない。

が、遠くにこの死の荒地で異変を見つけて彼女は慌てた。

「あっちへ！」

「あ、姉上？！」

突然、走り去る姉を慌てて追いかける。

時間にして数分・・・徐々に減速して立ち止り、鬼ごっこにも似た疾走がようやく終ったかのように思えた。

「あれは・・・」

目の前に広がるのは変わらず死の荒野。

が、そこに一人の少年が立っていた。

「バカな・・・さっきまで居なかったのに・・・」

少年は虚空を見詰め、ただそこに立っていた。

たまにピクッと反応するのでまだ生きているように思えたが・・・。

黒いフードを身に纏う女性はゆっくり静かに少年に近づき問いかけた。

「ねぇ・・・ここで何をやっているの？」

「・・・」

少年は何の反応も見せなかった。

シャツはボロボロで、穿いていたであろうズボンもボロボロで、その機能をほとんど果たしていなかった。

だが不思議と土埃などで汚れるはずであった体は綺麗であった。

「私の名は神咲瑪瑙（かんざきめのう）・・・で、こっちが妹の雫（しずく）。坊やの名前は？」

「ボクは・・・」

「うん？」

少年の言葉に瑪瑙は優しく問いかける。

「ボクは誰？」

その言葉に瑪瑙と雫は愕然とした。

だが、直ぐに立ち直った瑪瑙はそっと優しく少年を抱きしめ、

「そう・・・そうなのね・・・」

と呟き、涙を流した。

これが少年の初めての出会いであって、全ての物語の始まりだった。

memory. 000（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

ａｃｔ．００７（前書き）

仕事先で上司や同僚、後輩の半数が風邪で休むという・・・

act. 007

それぞれ色を持つ者が七名。

その七名の中心に座するは現王国女王、雫だった。

「――先日の帝国の奇襲作戦は『紫』の間諜部隊の報告のお陰で、こちらの被害は最小限で留め、あちらには多大な被害を与える事に成功しました。あちらの援軍や兵糧の輸送状態を考えると、ここ数週間以内には我等が王国から帝国を一掃できると思われます。報告は以上です」

聞いた雫が一つ頷き、

「ご苦労であったブロッケン・・・引き続きぬかりが無いように頼みます。あちらもいよいよ何かしらの最終手段を講じてくるでしょうから・・・そして、アルフも良くぞやってくれました」

「「勿体無きお言葉・・・」」

「他に報告はありますか？」

「・・・」

雫は一同を見回し、名乗り出る者が居ない事を確認したのち次の議題に移った。

「無いようなら、私から貴方達に言わねばならぬ事が二つあります」

そう言って一旦区切り、話を続けた。

「一つ目は『藍』の騎士団長マリアが明日を持って『白』に異動し新設の白薔薇近衛騎士団団長を冠します。だいぶ前から白薔薇近衛騎士団団長を名乗らせていますから皆知っていますね？　そして後任はヴォルフ・マーガレットが就任する事になります。まだ若輩であるため皆の助力が必要になるでしょう・・・手を貸してあげてください。次の軍儀から彼は出席します」

「はっ！」

雫の言葉を聞き、七人の騎士達が一糸乱れぬ返答を同時にした。

「そして二つ目は・・・」

――――コンコンッ！

雫の言葉はドアのノックと共に遮られた。

「失礼致します！」

勢い良く敬礼をする兵士に、ブロッケンが問いかける。

「何事だ？」

「いえ、それが女王陛下のご客人がいらしているのですが、どう対

応いたしましょう？」

「丁度良いですね・・・それが二つ目です。入れてあげてください」

「はっ！了解いたしました！」

女王の言葉を聞き兵士が退出したのを確認し、雫は言葉を続けた。

「皆さんには紹介が遅れましたが、この場を持って彼を貴方達に紹介します」

そう言うと再びドアをノックする音が鳴った。

「・・・入ってください」

扉が開くと同時に「「失礼いたします」」と二人の男の声が重なり聞こえた。

一人は黒で統一された衣装を身に纏い、自然体で入ってくる青年。

もう一人はその青年に緊張しているのかぎこちない動きで青年の後を付いてくる少年。

そして、二人が雫の隣に立ったのを確認して雫は言葉を続けた。

「既に会っている者も居るでしょうが紹介させてください。私の甥の灯馬と、その弟子である弥彦君です」

会議場がざわめきに支配された。

「すみません雫おば・・・いえ、女王陛下は今どちらにいらっしゃいますか？」

「陛下はただ今軍儀に参加されていると思われますが、どうされましたか？」

そう答えるのは自分が城で暮らす事になって以来、雫叔母さんが付けてくれた専属のメイドさんだった。

名前はノココ・アルバイン。

身長が１５０ｃｍあるかないかで、音が鳴るサンダルを履かせればとても破壊的な可愛さになるであろう少女であった。

最初は雫叔母さんの客人という事でギクシャクとした雰囲気であったが、話してみればとても可愛らしい少女で、歳が近い弥彦と直ぐに仲良くなっていた。

「実はその軍儀が終る頃に来て欲しいと言われているのですが・・・」

「きゃーーーーそうなんですか？！だったら早く言って下さい！着

替えていきますよ！」

とノココは慌てた様子で衣服を用意し始め、

「外で待っていますので、お二人とも急いで着替えて出てきてください」

バンッ！と扉を勢いよく閉め出て行った。

「師匠、とりあえず着替えましょう？」

「ぁあ、そうだな・・・」

何もあんなにバタバタしなくても良いと思うんだが・・・。

と心の中で呟いたのだった。

数分後、着替えが終って外に出るとノココに「遅いです！」と第一声を浴び、急かされながら会議場に向かった。

会議場の扉の前に到着し、兵士に事情を説明して入ろうとしたが止められてしまった。

「ただ今、軍儀中に付き外部の者の入場はできない事になっています」

と律儀に話してくれた兵士に噛み付いたのがノココだった。

「はぁ？！何言っているの？！女王陛下に呼ばれてここまで来たのに、ここで追い返すってどういう事？！」

まくし立てるように言葉を続けた。

「もしあんたの生真面目な性格のせいで、この方々や私が路頭に迷う事になったらどうするつもり？！責任とれる？！てか、取ってよ！七代先まで呪ってやろうかぁぁぁ？！！」

何を言っているのか途中から理解できなかったが、兵士の顔は見る見る青ざめて行き、そして悩んだ末に出した言葉が「ただいま、確認を取ってきます」だった。

哀れすぎる・・・。

とうのノココは「最初からそうしなよ！」と鼻息を荒くしていた。

「し、師匠・・・友達になる人間違えたかな？」

「何も言うな、弥彦・・・」

とビクビクする二人であった。

少しすると兵士が会議場から出てきて「失礼致しました！どうぞ、中へ！」と未だ青ざめた顔を残したまま道を空けた。

「でわ、お二人とも決して失礼の無い様にお願いしますよ？」

「は～い」と弥彦は返事をして、青年は「ああ、ここまでありがとう」と言い会議場の中に入って行ったのだった。

ａｃｔ．００７（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

act. 008（前書き）

忙しすぎる・・・人生で初めて会社に泊まって働くのを経験しました。

act. 008

「甥と言うのはどういう事ですか？」

先ほどまで戦況報告をしていた、ブロッケンが代表して言った。

「言葉通りの意味です」

「という事は・・・」

と、そこで雫がブロッケンの言葉を遮って言った。

「今から説明致します」

「はっ！」

そこで雫は一呼吸置き言葉を続けた。

「そうですね、簡単に説明すると・・・もう一人の『創生の魔女』である私の姉の息子にして弟子である人です」

「では・・・」

「そう、皆さんは既に感づいて居るでしょうが、この国・・・いえ、この世界の正式な正統継承者という事になるんでしょうかね？」

そう言うと雫は灯馬に視線を向け、それを受けた灯馬は苦笑いで無言の返答をした。

そこで初めて口を開いたのは灯馬だった。

「えっと、少々宜しいでしょうか？」

その場に居た者に一斉に視線を向けられ、灯馬は一瞬たじろいだが気を取り直して言葉を続けます。

「今、雫叔母さんの言った通り確かに自分にこの世界を管理する資格があるかもしれません」

一部の者に「雫叔母さん」と言い、睨まれたが気にする事無く続けた。

「しかし、今はこの世界を管理するつもりはありません」

そう言うと今度は雫に睨まれ冷や汗がドッと出た。

「その理由としては、あと一人・・・『三人目の創生の魔女』に出会っていないからです」

そう言うと再び会議場はざわめきに支配された。

創生の魔女。

異世界プリズムアークでは、その世界に住む者では知らない者が居ないと言われるほど、御伽話として有名な物語である。

だが、物語は時に間違った事を覚え伝えてしまったり、独自の解釈が広まっていた。

神に見捨てられた者が住み、神に見捨てられた世界プリズムアーク。

三人はそれぞれ傍観者、調停者、執行者として世界を管理する。

元居た世界に強い未練を残し、天国や地獄にもいけず彷徨っている者の最後の楽園。

———やり直すための世界。

魔女の中心人物であった一人目は、世界の創造と創生で力を使い果たし死に、

二人目は生ける伝説として悠久の時をこの世界の中心で見詰め、

三人目は世界が終る時その姿を現し、世界の敵を殲滅し、新たな導き手を世界に示す。

人生を謳歌せよ！

少ない命で悔いが残らぬように。
顔を上げろ、胸を張れ！
小さな幸せさえも見逃さぬように。
祈りが通じなくても私達は生きていける。
この素晴らしき世界で共に生きていこう。
『奇跡』は常にその胸の中に・・・。

「では、この世界が滅亡の危機に瀕しているという事ですか?!」
誰かが声を荒げて言った。
灯馬は雫に一度目を向け、雫は沈黙したままだったが一つ頷き、灯馬に言葉を続けるよう催促した。
「そうです・・・」
「バカな・・・！」

「これは確かな事です！」

未だざわめきが支配している中、灯馬は言葉を荒げ放った事により一瞬にして静かになった。

「これから話す事は、皆さんがこの世界の真実を知っている者だという事を前程にお話をします」

その一声で、全員の目が真剣なものに変わり灯馬は感嘆の息を漏らした。

———強いな・・・力だけではなく心も強い。よくこれだけの人達を集めたものだ。

その心内を知ってか知らずか、雫は細く微笑むのだった。

ａｃｔ．００８（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

ａｃｔ．００９（前書き）

そろそろインフルエンザの季節ですね。てか風邪引いた！

act. 009

三人目の『創生の魔女』の名は世界共通で禁忌となっている。

――彼女の名を知ろうとしてはいけない。

――彼女の名を知っても語ってはいけない。

――彼女が目覚めてしまうから。

――ほら、今でも彼女は名を呼ばれるのを待っている・・・。

言う事をきかない子供に、親が聞かせる御伽話の一節。

あながち間違ってはいない内容だが、雫叔母さんに言わせると、

「あの人はただサボって惰眠を貪っていたいだけで、怖い人ではないのですが・・・」

と苦笑いしていた。

だが、この世界に住む人達はそれを知るはずも無く、大きな天災が降りかかった時は「彼女が目覚めようとしているのだ！」と一部で

は怒りを静める為に生贄を捧げる習慣が根付いてしまった地域もあった。

そういう事情を含め、七騎士達は彼女の存在を表す言葉が出た時、咄嗟に反応したのも仕方が無かった。

――――では、話を戻そう。

「皆さんは今戦っている敵に何の疑問も持たないのですか？」

と灯馬は七騎士に問う。

「それはマクサス神聖帝国の事ですか？」

今度はマリアが代表して発言した。

「そうです・・・そこに疑問を持てないこと自体が、敵の策にはまっている証拠です」

「・・・？！！」

誰もが驚き、何がそうなのかを全く理解できなかった。

先ほどまでのざわめきがウソのように一瞬にして沈黙に変わってから数分が経とうとしていた。

思考にはまってしまった為か「何がダメなのか？」と聞く者は結局現れなかった。

「灯馬、あまり皆さんを虐めてはいけませんよ」

灯馬は誰か一人でも答えに辿り着いて欲しいが為に待っていたのだが、雫が優しく微笑みつつ言ったため気持ちを切り替えて、答えを話し始めた。

「この世界は神に見捨てられた者の為の、神に見捨てられた世界・・・」

そこでようやく答えに辿り着いた者が一人現れた。

「あ！そういう事か！」

黄色のマントを羽織った青年が「何故気がつかなかったんだ・・・」と苦悶の表情を浮かべていた。

「えっと、あなたは？」

「これは名乗り遅れました、私の名はゼロス・ノーティス。『黄』の騎士団団長を務めております」

背を正し、右拳（みぎこぶし）を左肩の前に立てつつ名乗った。

「ではノーティスさん『ゼロスでけっこうです』あ・・・では、ゼロスさん、続きをお願いできますか？」

「了解致しました」

そこでゼロスは七騎士の面々に向き直り、言葉を発した。

「皆、私達の世界では書物の『紙』や、この『髪』という表現はあっても『神』という表現は女王陛下自ら教えて頂くまでは知らなかったはずだ」

皆が一様に「しまった！」という表情と共に驚愕していた。

そう、それが全てだった。

神に見捨てられた者・・・そして世界に『神』という表現を与えなかったのは灯馬の母である瑪瑙の計らいであった。

「居ても何もしない・・・ただ見ている神を教えてどんな意味がある？彼ら無しでも生き抜くことが可能だという事を、これからこの世界で住む人々は知らずに悟っていくだろう・・・」

意図的に、生ける全ての生物のＤＮＡから『神』という言葉を消し去ったのだった。

そうした事情を知っている灯馬は最後に力強く発言した。

「この世界に『神』が干渉し始めました。それは彼らがこの世界を結局認める事が出来ず、ついに行動に出たという意味です」

ａｃｔ．００９（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

ａｎｏｔｈｅｒ．００１（前書き）

投稿が無い日は会社に泊まっているか、疲れて眠っている時・・・。

another. 001

どこまでも高く、どこまでも広く青い空の下に１２からなる浮遊体があった。

「彼女の意思を継ぐ者があの世界に現れたという事か？」

「どうやらそうらしい・・・」

「なんという事だ・・・しかし奴は『零秒の間』に永久凍結されているはずだが？」

「その凍結から誰かが開放したらしい」

「なんと・・・」

「我等の中に内通者が居るのかもしれんのぉ～」

「誰だというのだ？！」

「・・・・・今はその議論をする意味は無い」

「そう、問題は奴が彼女の意思と力を受け継ぎ、我等をも含めた全ての『天敵』を倒し、あの世界に渡ってしまったという事・・・」

「まさか、アレを倒すとはねぇ」

「『奇跡』か・・・」

「その定義は我等にも不確かなもの・・・下手に口にするものではない」

１２からなる浮遊体は時計回りの順に一人一人、発言していった。

そしてまた最初に発言した浮遊体に戻り・・・。

「あの世界の結界の綻び状態はどうだ？」

「強力すぎる為に時間はかかるが、世界への干渉は既に始まっている」

「戦況はやや不利な状態な為に一概に順調とは言いがたいな」

「結界のおかげで幾ら尖兵を送ろうにも、尖兵は本来の力が出せていない」

「たぶん、あの魔女も我等の行動に気が付き前々から布石を打っているのであろうな」

「厄介じゃのぉ～」

「しかし、計画は進んでいる」

「例の女（ファウスト）の調整はどうだ？」

「洗脳が４割と言ったところか・・・」

「力は我等に匹敵するぐらいにはしているよぉ～」

「まだまだだな・・・」

「もし、あの女（ファウスト）が倒される事があれば・・・是非も無く我等の出番だな」

沈黙が訪れる。

皆、それぞれ何を思っているのかを知る術はない。

そして最初に口を開いたのはやはり、一番目の浮遊体だった。

「今回はここで閉廷する。次回もまた明日のこの時間に・・・」

それを合図に次々と浮遊体は消え、最後に残ったのは・・・。

「・・・１１番目よ」

「なんだ、６番目」

「おぬしが奴を解放したのじゃろ？」

「・・・」

「やはりな・・・なに、つげ口はするつもりは無いよ」

「・・・」

１１番目と呼ばれ浮遊体は沈黙し続けたままだった。

「おぬしがやらねば、ワシがやっていただろうからのぉ～」

「・・・あなたは・・・」

「勘違いするなよ？全ておぬしに賛同しているわけではない。だが、我等もあり方を考えねばならぬ時期かもしれん」

そう言いつつ「カッカッカ！」と笑いながら６番目の浮遊は消えた。

あとに残ったのは１１番目の浮遊体。

「私は・・・」

その呟きを最後まで言う事なく１１番目の浮遊もまた消えた。

あとに残ったのは、変わらずあり続けるどこまでも高く、どこまでも広がる青い空だけだった。

another. 001（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

ａｃｔ．０１０（前書き）

予約投稿したはずなんですが、何故一個も上がってない？！
後が怖いな・・・。

act. 010

そしてそこから約1時間の時間をかけ今後の方針を決め、最後の締めに雫が口を開いた。

「最後に、戦時中とは言え今年も『白』認定試験と武術大会を開くわけですが、抜かりはないですね？」

誰も口に出して返答しなかったが沈黙が肯定の意味を持ち、雫もそこから問う事はせず締めくくった。

「それで今回の軍儀を終了します」

全員が同時に敬礼して順に退室し、最後の一人が出ていったのを確認してから雫は灯馬と弥彦に改めて向き直った。

「疲れましたか？」

微笑みかけながら聞かれた問いに弥彦は気が抜けたのか、一つ溜息を漏らし「疲れました～」と素直に返答していた。

「あらあら、ごめんなさいね・・・でも、反発が出なくて良かったですね」

「よく言いますよ・・・しかしアレだけの精鋭をそろえましたね」

と灯馬が悪態をつきつつも、先ほど感じた素直な感想を率直に述べ

た。

「ええ、皆さん頑張ってくれていますから。それに、伊達に正確な年数を忘れるほど同じ場所に立ち続けていますからね・・・無様な姿は見せられません」

「自分にとっては、あの日に別れてからまだ数十年しか経っていないようにしか感じれませんがね・・・」

「・・・」

灯馬や弥彦が元居た世界と、この世界の時間軸が大きく違う為に言えた事であった。

そして、その言葉に雫は沈黙し昔に思いを馳せた。

が、それも一瞬の事。

「では、私達三人の今後の方針に付いて話し合いましょうか」

と気持ちを切り替えて話し始めた。

その言葉に二人は「「はい」」と返事を返し、話し合いが始まった。

最初に口を開いたのは灯馬だった。

「では、オレから宜しいでしょうか？」

「どうぞ」

「まず、この世界の結界ですがこちらに来る途中にまた張りなおしておきました」

「それは有難うございます。流石に私には限界がありまして、ツギハギな物にしかならなかったのです」

申し訳無さそうに語る雫に対して灯馬は慌てて、

「いえいえ、こちらこそ有難うございます。もし雫叔母さんがやってくれてなければ、この世界はもっと悲惨な事になっていたでしょうから・・・」

と弁明した。

「『彼ら』の尖兵の数と力を抑えるだけで精一杯でしたので、そう言って頂けると助かります」

「はい、ここ二年から三年はあちらからの増援は不可能でしょう・・・この戦争もこちらから攻めなければこう着状態が続くと思います」

「ですがこちらから国境を越えて攻める行為は一切行うつもりはありません」

「はい・・・」

雫の意志は固く幾ら灯馬が言おうとそこには堅い決意が見えた。
彼女が遠い昔まだ幼いこの世界で、ある程度の国が成立した時、世界に向けて言った言葉が、

―――我が国は永久中立国として世界の一翼を担い、永久の繁栄をもたらす国とする。

とう高々と宣言をし、周りで戦争が起きようと自国が攻められない限りは一切の加入をしなかった。
それを『甘さ』と見た国が過去に何度か攻めてきたが、それらを全て撃退しあくまでも防衛の為だけに軍を動かしていた。

友好、停戦、同盟などの外交面では、仲介者として度々立つ事はあったが・・・。

「ですので、その間に弥彦をこちらの学園に入学させようかと考えています」
「え?!」

咄嗟に反応したのは弥彦だった。

「お前はもう１２歳になるのに、まともに学校や学園と言った場所で勉強した時は無いだろ？」

「はい・・・そうですが・・・」

灯馬と離ればなれになる寂しさを感じたのか、弥彦の表情は一変して暗くなった。

それを逸早く見抜いた雫がすかさずフォローを入れた。

「安心してください、弥彦君。灯馬もあなたと同じ学園の講師として働いて貰うつもりですから・・・」

「本当ですか？！」

「ええ、ですよね？」

雫の満面の笑みにたじたじになった灯馬は「ソウデスネ・・・」と辛うじて返事をしたのだった。

「しかし、再び始まるのですね・・・彼らとの戦争が・・・」

「こればっかりは回避は不可能でしょうね」

「・・・」

灯馬と雫は部屋の大きな窓から見える街に目を向けた。

それに釣られて弥彦も目を向け「綺麗な街ですね～」と言い、その言葉に雫は

「・・・ありがとう」

と一つ返事をした。

ａｃｔ．０１０（後書き）

こちらのミスで同じタイトルで重複投稿されていたら、気が付き次第直ぐに対処しますので、ご辛抱ください。

ご意見、ご感想お待ちしております。

act. 011（前書き）

着実にこの小説を見てくださる人が増えている・・・。
この場を借りてですが、有難うございます。
凄く励みになります。

act. 011

二年、または三年もの間はある程度の平和・・・自由が考えている上では約束されている為、その後の話はトントン拍子に進んでいった。

「では、3日後から王国が管理する学園に弥彦君は入学して頂きましょうか」

「ええ、構いません」

弥彦を無視して進められる灯馬と雫の会話に、弥彦は慌てて話しに割って入って来た。

「あ、あの！」

「「どうした（どうしました）？」」

同時に話しかけられ弥彦は急に押し黙り、泣きそうな顔を浮かべていた。

「ぁあ、ごめんごめん・・・無駄にそんな泣きそうな顔をするな」

「・・・はい」

「ほら、気持ちが落ち着いたら言って良いぞ？待っているから」

灯馬の優しさに触れ、また泣きそうになったが弥彦は鼻を一つスス
り二人に自分が思っていることを話し始めた。

「何個かあるんですけど、良いですか？」

「ええ、どうぞ」

雫もまた優しく微笑みつつ、弥彦が話すのをじっと待っていた。

「えっと、師匠とはちゃんと会えますか？」

上目使いで話す弥彦の可愛さは、普通の女性には十分過ぎるほど殺傷能力があったであろう。

「それは私が保証しましょう。ただ、下手なイザコザを防ぐ為にお二人の身分は偽っていただきますがね」

そう言い終えた後、すかさず灯馬が補足した。

「力はあってもその力の使い方をまだお前に教えてないからな。ただ師弟という立場から先生、生徒という立場に変わるだけで今までと変わらないさ。ね、雫叔母さん？」

「ええ、もちろんです」

灯馬の問いに、雫は笑顔で即答した。

「でも、師匠は師匠ですから！」

先生、生徒という呼び方が気に入らなかったのか、弥彦は顔を真っ赤にして叫んだ。

「ああ、解っている。後にも先にも弟子と呼ぶ存在は弥彦にしか許すつもりはないから」

「えへへ・・・」

灯馬の言葉を嬉しくも恥ずかしそうに、受け止めていた。

その後も弥彦の質問は続き、雫が主に返答し、灯馬は弥彦がかかえる心配を払拭する為に補足を入れる状態が続いた。

「以上です。有難うございました！」

先ほどまでの不安がウソのように無くなった弥彦は元気一杯にお礼を二人にした。

むしろ、三日後に入学する学園に多大な期待を抱いていた。

「いえいえ、お役に立ててなによりです。この後の予定はどうするつもりで？」

「そうですね、オレも弥彦もここに来て一週間経ちますが、まだ街を見ていませんので行ってみようかと」

「それは良いですね、是非ご覧になってきてください」
余程、今の街並みに自信があるのだろうか、強く勧めてきた。

「ではここで失礼させて頂きますね」

「はい、お気をつけて」

その言葉を最後に二人は退室し廊下に出たが、そこにはまだノココの姿があった。

「うわ～待っててくれていたんだ！ありがとう！」

ノココの姿を見るなり弥彦は駆け寄り、お礼を述べていた。

「当然の事です。七騎士様達が出てきた後も少し陛下とお話をされていたので？」

「ああ、少しね」

灯馬が困ったような顔を浮かべつつ返答したのを見て、ノココは自分が知らなくて良いことまで足を踏み入ったのを即座に察知し、すかさず謝罪した。

「これは余計な発言でした。大変失礼いたしました」

「いいよいいよ」

親しき仲にも礼儀あり。

ここ一週間でだいぶ親しくなったと言えど、陛下の客人。

ただの侍女である・・・しかも一階の平民出身たる自分がおいそれと聞いて良い事と悪い事の区別をつけるのを忘れるとは・・・。

ノココは自分の犯した過ちを必要以上に心の中で責めた。

そんな様子のノココを見た二人は「きっとオレ（師匠）の正体を知ったら失神しそうだ・・・」と哀れみの目を向け、フォローに入った。

「な、なぁ・・・これから二人で街に出ようと思うんだが、案内してくれないか？」

「うん、案内してくれない～？」

いつまでも下げ続ける頭を少し上げ、上目使いで灯馬の顔を覗き込んだ。

「私がですか？」

「ノココだったら街に詳しそうだし、陛下もノココを一緒に連れて行ってやってくれって言っていたからね」

「言ってた言ってた！」

灯馬のウソを含めた言葉を復唱する弥彦を尻目に見ながら「どうかな？」と駄目押しの一言を言った。

「わ、私でよければ是非ご案内いたします。いえ、ご案内させてください！」

「そんな堅苦しい言葉はいいからさ、いつも通りに、ね！」

と弥彦が言い、ナイスだ！と灯馬は呟いたのだった。

act. 011（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

感想板を誰でも書き込めるよう直しました。

act. 012

三人で王城の前にそびえる門をくぐり出て、最初に口を開いたのはノココだった。

「では、どちらから行きたいですか？」

「そうですね・・・弥彦、どこかあるか？」

「う～ん、お腹が空いたので何か食べたいです！」

「でしたら、こちらに・・・」

ノココが二人を促しつつ、歩を進めた。

三人が出た場所は王都の中でも特に活気がある大通りで『プリズムロード』と言われていた。

王都には主に四つの区画と四つの大通りに別れおり、区画はそれぞれ商業区、工業区、居住区、魔法区と呼ばれ、そして王城から正確に東西南北に真っ直ぐに伸びる四つの大通りがあった。

灯馬達が居る場所はその内の北に面する道だった。

そこは主に商業区が管理する場所であり、旅行者や交易目的で来たであろう商人などでごった返していた。

東は工業区。

南は居住区。
西は魔法区となっているらしく、数十年前に広大な土地にバラバラに存在していた店や家を一気に整備したらしい。
その結果、綺麗に区画として別けられ人々は特に反対するわけでもなく、むしろそうした方が効率が良いと判断し指示に従った。

「最後に来た時とはだいぶ様変わりしたなぁ～」
そんな灯馬の言葉にノココは返答した。
「なにせここは、世界の中心に位置すると謳われる街ですからね、自ずと人が集まってくるのです。国境からここに来るまでの道のりは、申請さえすれば無償で兵士が護衛として王都まで着いてきてくれますから。その為にここ数十年は盗賊や魔物の被害にあったという者は一切現れておりません」
「凄いな・・・それは・・・」
「ええ、全て陛下の計らいです。自分の国で人が死に、嘆くのは嫌だとおっしゃいまして、七騎士様の協力もあり実現いたしました」
言うのは簡単だが、実際それを実現できうる国はここを置いて他にはないであろう・・・。

少しでもお金を取れるなら、それを実行した方が色々と都合が利く。
だがそれをやらないという事は王国の知名度を利用し、旅路を安心してやってくる旅行者や商人が更に多くなり、黙っていても税金が自ずと増える。
先を見越した物だろうか？
そんな事を灯馬は考えていた。
あまつさえ「あの人ならやりかねないな・・・」
と呟きノココの後を追った。

「何か食べたい物はありますか？」
「「オススメの物で！」」
「・・・」
ノココは予想打にしない言葉に一瞬顔を引きつらせたが、気を取り直して
「では、私がいつも行っているお店で宜しいでしょうか？」
「「うん」」
似たもの同士なんだろうか？とノココは内心呟いた。

そして歩く事、数十分が経過しても未だに到着しそうに無い様子を見て、最初に不満を漏らしたのは弥彦だった。

「ま、まだ着かないの？疲れた・・・」

「申し訳ありません、やはり馬車を用意すれば良かったでしょうか？」

「いや大丈夫だ。弥彦そんな事を言っていると、今後色々と苦労するぞ？」

そう言われ、シュンとした表情を浮かべていた。

「う・・・ごめんなさい」

「本来なら既に到着しているんですが、大通りはこれからお祭りが開催されまして、はぐれる可能性を無くする為に遠回りをしていました」

申し訳無さそうに語るノココだったが、それならそれで早く言って欲しかった！と二人をそんな事を思っていた。

「しかし何の祭りなんだ？」

「来週開かれる武術大会と、再来週に開かれる『白』認定大会です」
「開催するのが早すぎないか？」
「本来ならそう思うでしょうが、この街に住む人は基本祭り好きなので・・・それにエントリーする為に先週から世界各地の武芸者や魔法使いが集まって居ますので、早めに開催して多く儲けようとしているらしいです」
とノココは苦渋を浮かべていた。
「ふ～ん・・・まあ暇があったら見に行こうかな・・・」
と灯馬は言い、弥彦はすかさず「ボクも一緒に見に行きたいです！」と言っていた。

その後も街を眺めながら歩き続け、ようやく目的の場所に到着するらしく
「あそこの店です。お肉料理がとても美味しいんですよ～！」
とノココが笑顔で店の前で手を大きく広げ紹介していたが、その直後、店の中から轟音と共に一人の人間が灯馬に向かって吹っ飛んできた。
すかさず灯馬はまだ見知らぬ人物を受け止め「おい、大丈夫か？」と声をかけたが、完全に意識を失っていた。

「お父さん?!」

ノココが慌てて駆け寄り、ボロボロになった父親の様態を確認し始めた。

「誰がこんな事を?!」

と発狂しかかりそうなノココを灯馬が落ち着かせて、先ほどから店の出口に悠然と立つ人物に視線を送った。

「貴族のボクに、なんて不味い物を食わせてくれたんだ!」

その言葉を合図にノココは視線を一層厳しくさせ、その人物を見据えた。

「貴方がやったのですか!」

「そうだよ? 知り合いが美味しいと言っていたもので来てみれば、とんだハズレだったな」

完全に人を見下した態度に灯馬や弥彦はイラッしたが、目の前で既に激怒するノココを見て軽く冷や汗をかいた。

「貴方・・・死んでください・・・」

とノココはドスの聞いた声を出し、

「はっ！やってみろ・・・先にボクがお前を殺してやるよ！」

と未だに人を見下す態度を崩さない貴族が言い放った。

突然始まった戦闘に、周囲の人達は慌てて避難し始めた。

「師匠ちょっとやばいんじゃ？」

「よく気がついたな。しかし、ノココがキレるとあーなるのか・・・」

「ノココも強いけど、あのボンクラの方がまだ強い・・・」

「ああ、まぁやばくなったら止めに入るか」

「ボクも手伝います」

そんな会話をしつつ、視線を向けるはノココと名も知らぬ貴族。

灯馬の顔は、結局晴れる事はなかった。

ａｃｔ．０１２（後書き）

正確な悪役像が思い浮かばない！

ご意見、ご感想お待ちしております。

act. 013（前書き）

このサイトの好きな作家さんの小説が中々更新されなくて、結構ジレンマを抱えてたりします。気がついたら削除されてた！って事もしばしば・・・。

act. 013

最初に動いたのはノココだった。

懐から彼女の身長の半分ぐらいの大きさの鉈を取り出し、貴族に向かって一気に振りかぶった。

だがそれは貴族の数ミリ前で突然停止し、ノココを焦らせた。

「なっ！？」

「その程度の力量でボクを殺すだって？！　あははは、ふざけるのも大概にしろ！」

そう言うと、貴族はノココに向かって手を振りかざし、

――――破っ！

と一喝を入れ、ノココを弾き飛ばした。

「師匠、あれは・・・」

「『気』じゃない、魔法の詠唱破棄だ。だが・・・」

と灯馬が言い終える前に、再び目の前の二人が動いた。

吹き飛ばされたかのように見えたノココだったが寸前の所で避け、貴族の背後に回りこみ再び鉈を振るった。

が、それも先ほどと同じようにまた肌に届く数ミリ前で静止していた。

「だからボクにはそんな攻撃は届かないって！」

と貴族がノココに向かって腕を振りかぶったのと同時に突風が起こり、正確にノココの体を今度こそ捉え、吹き飛ばした。

———ドゴッ！

ノココが吹き飛ばされ壁に衝突する際、鈍い音と苦悶の声が響いた。

「うっ・・・」

だが、貴族の攻撃は止む事は無く、トドメとばかりに魔法の詠唱を開始した。

風を奏でし者よ。
汝の吐息を我に敵対する者へ吐け・・・。
「エリアルランスッッ！！」
空気が貴族の掌の上で圧縮され、それがノココに向かって一気に放たれた。
それは人を刺す為に作られた槍と同じ形を模り、常人なら目視できないほどの速度だった。
ノココに突き刺さる！
とその場に居た誰もが視覚的に・・・または感覚的に思った。
が、それは寸前のところで止まり、灯馬が口を開いた。
「そこまでする必要はないだろ、殺す気かよ？」
「誰だっ？！」

貴族を見据えつつ風の槍の柄の部分を掴み、それを一気に握りつぶした。

――――パリン。

「あ・・・灯馬さん・・・・」

「ノココ大丈夫か？」

「はい・・・ただ、何日かは動けそうにありません・・・・」

「あとで回復してやる」

「――――ボクを無視するな！！」

と辺りに怒号が響いた。

灯馬はノココから貴族に再び視線を戻し、

「あ～大丈夫だ。ちゃんと、こいつに変わって俺が相手をしてやるからな？」

と言った。

「平民の分際でボクを見下してるんじゃない！！」

人を見下した態度を取る灯馬に貴族はさらに怒りを増し、再び魔法の詠唱を始めた。

風をかなでし・・・うっ？！

突然、口を押さえられ慌てふためく貴族は驚愕にまみれた。

「どこに魔法の詠唱を完了するまで待っているバカが居るんだよ」

先ほどまで十分な距離があったはずなのに、零距離まで詰められ頭で理解しようにも追いつけなかった。

「驚いているか？そうか、そうか・・・」

と灯馬は悪戯な笑みを浮かべ、そのまま顔を掴みただ力任せに貴族をぶん投げた。

「ぐあっ！」

「痛いよなァ～？」

「うぅ・・・ボクにこんな事をして・・・・」

「まだ痛い目を見たいらしい」

未だに反抗的な態度を取る貴族に向かって灯馬は手を振りかざした。

「お仕置きだ」

その一声で地面に痛みで地面にうずくまる貴族に異変が起こり始めた。

「ぐぁあああああ！」

突然発せられる貴族の叫び声に、誰もが驚いた。

「お前はある程度強いかもしれない・・・だがその強さは練習の時か、あからさまに自分より確下な相手だけだ」

無表情のまま淡々と語る灯馬に、周囲は寒気を覚えた。

「人って言うのは悲しいよな？自分が強いと過信した時から弱くなるのに・・・それに気がつかない」

貴族の叫び声は已む事は無く、何が起こっているのかさえ弥彦以外は気がつけなかった。

周りから見ればただ灯馬は貴族に向かって手を振りかざしているだけであって、多少魔力を感知できる者であっても、彼が魔法以外の何かを使っている事しかわからなかった。

そして不意に貴族の叫び声が止み、灯馬は振りかざした手を下ろした。

―――貴族を殺した・・・。

そう思った者が大半を占めたであろうか。

そこに第三者の声が轟いた。

「警備隊である！何事だ！！？」

その言葉が戦闘終了の合図だった。

ａｃｔ．０１３（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

another. 002（前書き）

スロットに手を出してしまったｏｒｚ

another. 002

王城で働いてもう2年になるだろうか。

近い内に正式に『白』に昇格するマリア様の紹介で、侍女として働かせて頂いている。

侍女と言っても陛下やご客人の身の回りの世話だけに留まらなかった。

王城に来て最初の半年は食器の洗い方やシーツの変え方ではなく、戦闘訓練だった。

———灰色。

国民や、一般兵士には知られていない秘密組織。

『灰燼(かいじん)』という二つ名を持つ団長を筆頭に、王城で働く全ての侍女がこの組織に属している。

今から約百五十年前、敵国に王都まで攻め上られた時の反省を踏まえて設立されたらしいが、下っ端の私には知らなくて良い事だった。

何も攻めてくるのは大量の兵士だけではない。

日々、陛下のお命を狙う暗殺者にもまた注意しなければならい。

お部屋直しの際の些細な環境変化や、いつの間にか侍女として紛れるスパイや暗殺者・・・見慣れぬ者を確認した際は全て上に報告する事が義務付けられている。

そして極め付けは機密漏洩の為に特殊な魔法を頭と舌に施され機密を話せないようにする徹底ぶりであった。

それ故に組織の存在を外部に漏らすことなく存在し続けている。

魔法によって物質の固定・分解が使える私は武器を主立って携帯する必要は無く、服の裏に鉈の鉄の粒子を付着させ常に行動している。

血反吐を吐くほどの訓練の成果で大抵の敵を倒せる自負はあった。

が、いざそれに直面すると訓練だけでは覆せない物も出てくる。

どんな勇者や英雄と呼ばれる者全てが経験しているであろう初めて

の実戦。

それが陛下のご客人である灯馬様と弥彦様の前で経験するとは思わなかった。

しかも、私の父を傷つけられ頭に血が上った末に無様に負ける事になるとは・・・。

「大丈夫、安心して！仇は師匠が取ってくれるから！」

途切れ途切れの意識の中、直接頭の中に語りかけてくるような声の主は弥彦様だった。

「申し訳ございません・・・私のせいで・・・」

「今日は謝ってばっかりだね？気にしなくて良いのに。それより自分の心配してよ！」

困った表情を浮かべる弥彦様に私は次の言葉が話せないで居た。

「始まるよ・・・あのボンクラ貴族じゃ師匠に傷一つ負わせる事はできないだろうけど」

そう言う弥彦様から灯馬様に視線を移す。

あの貴族も只者ではないはずなのに、灯馬様の余裕の表情を見てなぜか安堵が浮かぶ。

しかし、安堵と一緒に違和感も浮かぶ。

何か・・・何かを見逃しているような・・・。

灯馬様とまだ名も知らぬ貴族を注意して見てみると、ようやく今回自分がやってしまった本当の失態が判った。

あの貴族の名はルフィル・ケープナ。

七騎士『緑』の名を冠し、王国貴族や総合商会の筆頭であるエラント・ケープナ様のご子息だった。

「戦ってはいけ・・・うぅ・・・」

自分が招いた戦いを止めさせようと立ち上がろうとしたが、痛みでそれが出来なかった。

―――なんとかしないと！

その思いが通じたのか、戦いの様子を見ていた弥彦様が口を開いた。

「大丈夫・・・そこら辺も含めて師匠は戦っているから心配しなくて良いよ？」

「え・・・？」

心を読んだ？

問いかけようとしたが、そこで第三者の介入によって言葉は阻まれた。

「警備隊である！何事だ！！？」

ａｎｏｔｈｅｒ．００２（後書き）

ご意見、ご完走をお待ちしております。

memory. 001（前書き）

ここ一週間が勝負時。

memory. 001

―――バンッ！

「姉上、私は反対です！」

ノックも無く扉を開け、入るなり早足で瑪瑙の傍により近くの机に掌を叩き、いきなり反対し始めたのは雫だった。

「世界中で忽然と消失した都市の原因・・・いえ、彼の行方を追っています」

「・・・」

「何故・・・何故ですか！何故、彼を養子に向かいいれたのですか？」

「・・・」

「彼の存在がバレれば、いくら姉上でもただじゃ済みませんよ？」

「・・・」

「っっ！！！」

雫がいくら攻め立てようにも、瑪瑙はただ微笑み雫の言葉を聞いていた。

埒が明かない・・・。と雫はまた怒りを増しそうなのをグッと堪え、心を落ち着かせた。

その様子を見て、瑪瑙はようやく口を開いた。

「彼を私の後継者にしようと考えています」

「えっ?!」

突然の発言に呆気にとられ、雫は頭が真っ白になった。

「こ・・・こうけいしゃ?」

「そう、後継者です」

「え・・・?」

「既に私の元に集っている後継者候補は明後日をもって破門とします」

その言葉を聞いてようやく雫は自我を取り戻し、先ほど抑えた怒りをまた爆発させた。

「バカな事をおっしゃらないでください!!!」

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

それから数分あまり雫は瑪瑙に対してまくし立てた。

息は切れ切れになり、

「姉上・・・よくお考えください。今の門下生達は組織から送られた貴重な人材ばかり・・・そこら辺から拾って来たのでは無いのですよ？」

「解っています。でも、彼らに一つだけ言える事があります」

「・・・？」

「彼らには私の後継者たる資格がありません。そして貴方にも・・・」

「承知の上です。しかし、それで黙っているほど彼らもお人よしではないはずです！」

「ええ・・・ですから、力を証明すれば良いのでしょう？」

瑪瑙の挑発的な発言に雫は言葉を詰まらせた。

と同時に瑪瑙の揺ぎ無い固い意志を感じてしまい、次の言葉が出なかった。

「明後日、修練場で彼と門下生全員で戦って頂きましょうか・・・」

「無茶な！」

「無茶でもやらないといけないでしょう？」

「・・・」

「それでも尚、意義を唱える者は私が直接お相手いたしましょう」

『奇跡の魔法使い』として世界の頂点に君臨する瑪瑙。

その門下生達も日々、瑪瑙の頂に辿り着こうと必死に修練に励む彼らに生半可な相手ではまず負ける事はないであろう。

だが何故だろう？

ここまで自信に満ち、見方によっては過信に溢れている瑪瑙を見て雫はなんとも言えない気分になった。

「雫・・・」

「はい、姉上」

「いつもごめんなさいね・・・でも、貴方が居たから私は自分の力に溺れることはなかった」

その言葉を聞いて不意に雫の目に涙が溜まっていた。

「貴方が居たから私はここに居る・・・いつも苦労かけてしまって・・・」

そう言って瑪瑙は一呼吸置き。

「今までありがとう。そしてこれからも頼みますね？」

その言葉を聞いて雫は何かを悟ったのだろうか。

溢れた涙が頬をつたい始めた。

そして方膝を付き、

「大丈夫です、姉上。この心は常に姉上と共に・・・」

血の繋がった家族であるからこそ出来る誓い。

そして忠誠。

「神咲家現頭首、神咲雫の名に置いて神咲瑪瑙・・・貴女に付き従います」

そう締めくくったのであった。

memory. 001（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

act. 014（前書き）

入院していた為、更新が遅れました。過労で風邪が悪化して職場でぶっ倒れていました。

act. 014

「此度は私の息子が大変無礼を働きました・・・」

そう言い深々と頭を下げるのは『緑』の名を冠するエラント・ケープナだった。

「この罰はいかようにも・・・場合によっては七騎士『緑』の名を返上する覚悟でございます」

灯馬と、目の前で深く頭を下げるエラントの息子ルフィルに一方的な力を見せつけてから2日が経っていた。

灯馬の素性を知らない警備隊は貴族に暴力を働いたという事でその場で灯馬を捉え投獄し相手が灯馬だと知らなかったエラントは激怒し息子を傷つけた者を「死刑だ！」と叫び、自ら手を下そうと牢獄まで赴いたが、灯馬の存在を知り慌てて謝罪をし始めた。

事情を知らなかったとは言え投獄した警備隊やそれを管轄する『藍』にまで責任問題を唱える者が現れてしまい、それを収拾すべく主だった者を全員、雫が王城の大会議場に呼び寄せた。

エラントの謝罪の言葉を聞き、最初に口を開いたのは雫だった。

「エラント・ケープナ」

「はっ！」

エラントは名を呼ばれ、慌てて姿勢を正した。

「此度の件ですが、不問と致します。ただ、貴方の息子への教育は問いたださなくてはいけませんかね」

「・・・」

エラントは不問と聞き内心ホッとしたが、やはり自分の息子への追求は止められなかった事に舌打ちをしたくなった。

「貴族がそんなに偉いのか・・・この王国に住む者だけに留まらず、貴族が存在している国では誰もが思っていることでしょう」

「・・・はい」

「貴族も・・・そして私達王族も彼ら民の上に立つ者ですが、民無くして国は成り立ちません。それは理解しておりますね？」

「・・・はい」

「貴方の息子、ルフィルの日頃の行動を調べさせて頂きました」

「・・・っ！」

「決して良き見本になれるとは言えませんね・・・」

「申し訳・・・ございません」

再びエラントは頭を深く下げた。

平民へのいわれの無い暴行。

無銭飲食。

などなど・・・エラント・ケープナの存在があったせいか、それらの罪が表に立つことは無かったが、それらはちゃんと記録、保管され残っていたために雫が事前に目を通しておいたのだった。

「なので貴方にでは無く、貴方の息子に罪を問います」

「・・・謹んでお受けいたします」

頭を下げ表情は伺えないが、きっとその顔は苦渋に満ちているのだろう。

だがそれを気にする素振も見せない雫は言葉を続けた。

「では、ルフィル・ケープナをこの場に呼んでください」

その言葉を合図に衛兵の一人が大会議場から退室し、数分後にルフ

ィルと共に入場した。
誰もエラントの家庭事情まで口を出すつもりは無い。
ルフィルも一人の大人と考えた上で、判断を下そうと考えていたのであった。

「ルフィル・ケープナ参上致しました」
声だけを聞くと自信に満ち溢れている様子だったが、反面、顔は青みがかっており自身のやった過ちが公になった事への不安が目に見えていた。
ルフィルが父親であるエラントの隣に並び頭を下げるのを確認した雫は再び口を開いた。
「貴方がルフィル・ケープナですね？」
「はい、私がルフィル・ケープナです」
何時ぞやの傲慢な態度を一切見せないルフィルを見て灯馬は、上に対する礼儀だけはしっかり覚えているのだと舌を巻いた。
「今回貴方を呼んだ理由はお解りですか？」
雫は声を荒げる様子もなく、ただ淡々と問いかけた。
「・・・私がそちらにいらっしゃいます、陛下の甥を傷つけようと

した件で御座いましょうか・・・」

「いいえ、それは違いますよ。彼の存在は極一部の者しか知りえませんでしたし、彼は力を持つ者・・・降りかかった火の粉を一人で振り払うことは造作もありません」

「では・・・」

なんだ？と、そう言いたかったのだろうか？

ルフィルはそれ以外に呼ばれる理由は無いと目が語っていた。

――――本当に自覚が無いのか？

灯馬や雫を含め周囲の者は一様に思った。

隣に居るエラントでさえ、自分の息子の愚かさを改めて認識したのであった。

「そうですか・・・貴方は・・・」

雫は何かを言いかけ途中で止め黙り込んでしまったのであった。

「宜しいでしょうか？」

一瞬の沈黙を破ったのは、今までルフィルの隣で傍観を決めていたエラントだった。

「なんですか？」

「私の息子はまだ己の愚かさに気が付いておりません」

「そのようですね・・・」

その時初めて雫は無表情だった顔を崩し、少し苦渋を浮かべた。

「ですので、陛下や私が言った所でまた同じ過ちを繰り返す可能性が高いと思われる為、陛下の甥である灯馬様に教育を任せても宜しいでしょうか？」

エラントのあまりにも唐突な発言に誰もが驚いた瞬間だった。

ａｃｔ．０１４（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

act. 015（前書き）

風邪が治らないぃぃ！

act. 015

「聞けば、灯馬様は明日より王国が管理するアルミス学園で教員に赴任し、個人で講義を開くと聞き及んでおります。そこで一から改めて学ばせていただきたいのです」

それを聞いて誰もが驚いていたが、一番驚いたのはルフィルであろうか。

瞳孔まで開ききったような眼でエラントを見詰めていた。

その様子を知ってか知らずか雫は一度灯馬に視線を向け、再びエラントとルフィルの二人に視線を戻し口を開いた。

「そうですね、それは認めましょう」

雫のその言葉を聞いて灯馬は内心溜息をついた。

「しかし、それだけでは軽すぎるでしょうね」

「はい・・・」

エラントも雫の言葉を事前に予想していたのか、重々しくありながら返事をした。

「ルフィル・ケープナ！」

「はっ！」

突然、雫に名前を呼ばれルフィルは慌てて姿勢を正した。

「貴方は今年で学園を卒業する身ですが卒業するまで灯馬の下にて勉学に励みなさい。他の教科は受けなくて構いません。それと現在、あなたが得ている称号『ヘキサゴン・プライド』は一時没収いたします。今回の罰に関する異議がある場合は、まず貴方の過去の行いを思い出してください。それでも尚、理由がわからない場合は貴方の父親に問いなさい」

―――ヘキサゴン・プライド。

トライアングル、スクウェア、ペンタゴンなど学生が持てる称号の一つで、その最高峰に位置する。

年に一度その試験が学生を対象に行われ、ルフィルは去年のその試験に受かっていた。

トライアングルで百人に一人。

スクウェアで千人に一人。

ペンタゴンで五千人に一人。

そしてヘキサゴンで一万人に一人受かれば良いと言われているほど、高く狭き門の試験であった。

故にトライアングルを受かれば一種のエリートコースはほぼ約束され、ほとんどの学生は学園での勉学と同時にこの試験に受かる為に

日々勤しんでいる。

ルフィルに関して言えば幼い頃から神童と謳われその才能を遺憾なく発揮し将来、エラント家の家督を継ぐと言われているほどだった。

故に将来の七騎士の最有力候補と言われ、周囲からチヤホヤされた結果がこの歪んだ性格を生み出したのではないか？と言うのが、灯馬と雫の結論だった。

が、真実を知る事はできない。

話を戻そう・・・。

「はっ・・・謹んでお受けいたします」

雫にそう言われ、ルフィルは納得いかない顔で・・・それでも陛下の前であるが故に、必死に平静を保とうとした顔で返事をした。

「最後に『藍』新団長ヴォルフ・マーガレット、前へ」

「はっ！」

雫に呼ばれ、大会議場に響いたのはまだ若い女性の声だった。

すかさずエラントとルフィルは今で居た場所を入れ替わりでヴォル

フに譲っていた。

灯馬は彼女の姿を見るのはこの場で初めてであった。

最初に目がついたのはその見事な白髪・・・いや、銀髪。

大会議場に差し込む太陽の光が、彼女の髪をキラキラと輝かせていた。

顔立ちと相まって、一つ見間違えればどこぞの国の王女様をも淘汰するレベルだった。

「今回、貴女をも罪に問う事はもちろん致しません」

「はっ、ありがとうございます！」

「ですが『藍』団長に新任早々申し訳ありませんが、仕事を与えます」

「なんなりと・・・」

ヴォルフにそう問い返され一瞬雫はルフィルに視線を向けまた直ぐに視線を戻し、口を開いた。

「今回のように貴族など勝手な言い分で、横暴を働いている者が居るかもしれません・・・いえ、きっと居るでしょう。ですから、それらを全て書類にまとめて私に提出してください。新たにそれらの行動を取っている場合、即刻投獄して構いません」

「一つ宜しいでしょうか？」

「なんでしょう？」

「大変失礼な発言ですが、それはどこまで調べ上げれば宜しいでしょうか？」

「ああ、それは私の甥の灯馬をも範疇に含めて良いか？そういう事ですか？」

「はっ！」

「ええ、もちろん構いません」

「了解いたしました」

「家督を獲ている者の不正などが判明した場合はまた別途、私か監査部に報告してください」

「はっ！」

「以上です」

その言葉を合図にヴォルフも所定の位置に戻り、雫は改めて口を開いた。

「他の誰かがやっているから良い。オレは偉いから何をやっても良

い。そんな甘い考えはこの王国で上に立つ者には一切許されません。
それが腐敗の第一歩になるのですから・・・皆さん心新たに王国の
為に尽力を尽くしてください」

「「「はっ！」」」

そう言うと次々と大会議場に居た者が一礼して退室していった。

最後に残ったのはやはり、灯馬と雫だった。

「やれやれ、偉く面倒な事を押し付けてくれましたね」

そう苦渋しつつ言ったのは灯馬だった。

「やりがいを与えただけですよ・・・二、三年後までのんびり過ご
してもらっては困りますからね」

「ばれてますか」

「ええ、バッチリと」

そう言って二人は笑いあった。

「しかし、彼・・・ルフィル君の素質は素晴らしいですね」

「ええ、エラントさんも才能に溢れた息子を産んで鼻高らかでしょ
うが、手放しすぎましたね」

「ええ・・・」

そして、雫は立ち上がり灯馬に向き直って言葉を続けた。

「明日から教師として学園に行くわけですが、緊張していませんか？」

「よして下さいよ、子供じゃあるまいし」

「いえいえ、私にとって貴方は弟であり息子でもあるわけですから・・・」

「はは、じゃせめて弥彦にそれを言ってあげてください」

「後で言いに行きましょうかね？」

「ええ、あいつ喜ぶと思います」

そう再び二人は笑いあったが、不意に雫の顔が真剣な物に変わった。

「弥彦君に力を受け継ぐつもりですか？」

「どうでしょうかね・・・誰もが落ちる『闇』を踏破できればですが」

「そう・・・では、貴方に何があったのですか？」

「・・・」

雫に問われ、灯馬の目が鋭い物へ変わった。

そして彼女はそれを見て核心を得た。
「久しぶりに貴方の姿を見たあの時、私は・・・」
「それ以上言わないでくれませんか？昔は昔です」
「しかし人は過去無くして今を生きれません。過去に依存する人も居ますが、灯馬は違うのですか？」
「・・・」
「瑪瑙お姉様には敵いませんが、私も灯馬の味方の一人のつもりです」
「・・・」
「良ければ話してくださいませんか？」
慈愛に満ちた声で雫がそう言うと、灯馬の頬に一筋の涙が流れ落ちた。
「最愛の人と親友をこの手で殺しました・・・」
「っ！」
一つの涙が作った道を次々と新しい涙が通り過ぎていく。
「殺し・・・たく、なかった・・・」
漏れ出る声を押し殺し灯馬は泣き続けた。

そんな灯馬を見て雫はそっと灯馬を優しく抱きしめ、

「辛かったでしょう・・・」

そう灯馬の耳元で囁き雫は昔、瑪瑙に言われた言葉を思い出した。

――――人々は知らない。自分がいかに細く、脆い糸の上を日々歩いているか。

貴方が歩いている道はもう崩れ落ちたのですか？

ならば私がお姉様の変わりに貴方の新しい道を作りましょう。

どこへ行くのかは貴方が決めるのです、灯馬。

act. 015（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

act. 016（前書き）

寒いですねェ～！秋来たっけ？

act. 016

騒動から一夜明け、灯馬と弥彦は今日から行くことになる学園への仕度をしていた。

――――コンコン。

そんな時、扉を叩く音が聞こえ、

「開いています。どうぞ」

と灯馬は訪問者を向かい入れた。

「失礼致します。」

その言葉と共に扉は開かれ、そこに居たのはノココだった。

「おはよう御座います。灯馬様、弥彦様」

「おっはよ〜！ノココ！」

と元気一杯に挨拶したのは弥彦だった。

それに続き灯馬も「おはよう」と一つ言葉を交わした。

「先日は大変失礼致しました」

「気にするなって、それより傷は大丈夫か？」

「はい、灯馬様が回復して頂きましたお陰で無事、仕事に戻ることが出来ました。それと叔父も一度お会いしてお礼を述べたいと・・・」

「そうか、あの人も無事だったんだな。改めてご飯食べに行かないとな」

「はい、その時はまた私がご案内させて頂きます」

とノココは深く頭を下げ、出会った頃の硬さが再び戻っているように感じた。

それを見かねてか弥彦が口を開いた。

「ノココ・・・えいっ！」

「きゃっ！！？」

深く頭を下げ続けるノココの背後に回りこみ弥彦はノココの脇腹に人差し指を付きいれ、くすぐったさか、痛みかは解らないがノココは突然襲った衝撃に可愛らしい声を上げた。

「あはは、やっぱりどこに行ってもこれは効くですね！師匠」

「ああ、そうみたいだな」

と二人で笑い合い、ノココはと言うと顔を真っ赤にして何が起こったか把握しきれないでいた。

そして事情がようやく把握できたのか、黒いオーラがフツフツとノ

ココの体から溢れ出し、

「・・・うぅ〜〜！お二方！！！お説教です！」

「「っはい！！」

とみっちりと叱られたのであった。

「それではお二人共、行ってらっしゃいませ」

その後、二人は遅刻ギリギリになるまで説教をされ慌てて走っていった。

「「いってきま〜〜す！」」

と変わらない二人を見て、どこか微笑むノココだった。

———アルミス学園。

世界最大規模の学園である。

完全実力主義を掲げ、実力があるのならドンドン上へと昇れる制度を取っている。

学生数は約三万人。

下は五歳児から上は八十歳と、幅広い生徒がこの学園に通っており、完全実力主義という方針を掲げているため早い者は過去最短で3ヶ月で卒業し、長くなれば数十年この学校に通っている者も居る。

卒業出来る資格があっても学校に在籍し続ける者もおり、気が付いたら約3万人というマンモス学園になっていたというのが、本当のところだったりする。

その分学園に居続ける為に払うお金もかかるわけだが、そこは奨学金制度や学園の掲示板に張られるギルドなどの依頼でお金を稼ぐ事が出来るためにそこまで問題視している者は居なかった。

――――来る者は拒まず、教師達の手で生徒の実力を磨き上げ学園を運営して行きましょう。

それが学園完成時に雫が言った言葉だった。

よって、入学試験などは存在しないが入学後の試験が厳しいと有名であり、例え一点であったとしても赤点を取った場合は即刻退学という条件の下、生徒は日々切磋琢磨し続けている。

学科は主に三つに分かれている。

傭兵学科。

魔法学科。

商業学科。

そこからピラミッド式にそれぞれ枝分かれし、ほぼ全ての授業を網羅している。

そして弥彦は転入生として魔法学科に属する一つの教室に通い、一方灯馬が教鞭を振るう学科は「総合学科」という、また特殊な学科であった。

「師匠、頑張りましょうね！」

「ああ・・・」

そう言って、二人は学園の門をくぐったのであった。

act. 016（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

memory. 002

ゴッ！

という鈍い音と共に、一人の男が途切れ途切れの意識をギリギリ保ちながら灯馬を怨敵のように睨みつけた。

だがそれも長く続かず、力がスッ抜け地に伏した。

「・・・ここまでですね」

「はい」

そう言ったのは瑪瑙と雫であった。

灯馬を中心に、二十八人もの弟子あった者がうめき声を上げて悶えていた。

「・・・」

灯馬は何も言わない。

先ほどまで戦っていた者達に対する興味が失せたのか、虚空をただ見詰めていた。

彼が何を考えているのか？

瑪瑙や雫でさえわからなかった。

むしろ何も考えていないかもしれない。

雫は渋い表情を浮かべたまま、瑪瑙に問いかけた。

「圧倒的過ぎますね・・・姉上、何を教えたのですか？」

「ただ彼が産まれ持って得ていた力の使い方を・・・」

そう言い瑪瑙は灯馬に近づき灯馬の身長・・・目線に合わせるように腰を屈めて再び口を開いた。

「どうでしょうか？私がこの前貴方に話した事は考えて頂きましたか？」

「・・・」

瑪瑙の問いに灯馬は何も答えない。

「貴方には私の後継者になる資格があります」

「・・・」

「ただ私は貴方をそれだけの為に共に同じ時を過ごしたくありません」

「・・・」

「ですから・・・」

そこで言葉を一旦区切り、瑪瑙は力強く言葉を発した。

「私と家族になりませんか？」

瑪瑙がそう言った事で灯馬に初めて変化が訪れた。

「カゾク？」

「そう、家族です」

満面の笑みで言う瑪瑙を灯馬は意味が解らないと言った表情で見詰めた。

そして囁くように優しく・・・優しく瑪瑙は言った。

「私の息子になりませんか？」

「ムスコ・・・」

そう言った時、灯馬の右目から一筋の涙が流れ落ちた。

「わからない・・・それは何？」

「とても温かいものです」

「温かい・・・」

そう言うと、今度は灯馬の左目から涙が流れ落ちた。

「この世界は一人で生きていくには余りに辛い」

「・・・」

「ですから、共に過ごしませんか？微力ながら私は貴方の為なら、可能な限り最良な人生を歩めるよう手助けします。それが親の資格ですから」

「・・・」

良いたい事を言ったのか満足そうに瑪瑙は一つ頷き背筋を伸ばして、雫に振り返った。

「雫、これから忙しくなりますよ、ついて来れますか？」

「・・・は、はい！姉上！！」

それから数日後、灯馬は自らの口で瑪瑙と雫に、

「なる・・・家族になりたい」

と言ったのであった。

memory. 002（後書き）

入院してました。

「これ以上、今の生活をすれば来年以降一生ベット上で生活する事になります」

と言われビビリました。

会社も近い内にやめ、また新しい仕事探す予定です。

更新も日を空けずにまたやって行きたいと思いますのでヨロシクお願いします。

ご意見、ご感想お待ちしております。

another. 003

―――私は眼を閉じている。

「眠り姫の調整はどうだ？」

不意に背後から声がかかるものの、問いかけられた白衣の男は驚くことはせず、振り向きつつゆっくり返答した。

「はっ・・・洗脳は上手い具合に進みませんが、能力は当初の予定を超えた数値を出しています。これでは・・・」

「僕達よりも強くなっちゃうかなぁ～？」

一度振り返ったものの、また逆の方から声がかかり白衣の男は二人を見据えれる位置に移動した。

―――私は眠っている。

「はい・・・」

「そっか～・・・流石はアイツの女だね！！」

意気揚揚と語るものの眼光は鋭いままだった。

「洗脳は進まないのはどうしてだ？」

「はい、それは彼女の記憶の奥底に生前の記憶が潜在的に眠っているせいかと・・・」

「記憶は消したが・・・『絆』は消せないか・・・」

「・・・」

白衣の男は何も答えない。

だが、その沈黙を破るように一人が口を開いた。

「あはは！何を言っているのさ９番目！そんな僕らにも見えないものを考えるのは『あの人』への冒涜だよ？」

「そうだな１０番目・・・」

「・・・」

気まずい沈黙が三人を支配した。

――――奪わせない。あの人と、みんなの記憶だけは奪わせない！

「？！」

「どうしたの？９番目」

「どうされました？」

９番目と呼ばれた男が未だ眠り続ける少女に対して咄嗟に身構えたのを見て、１０番目と呼ばれた女性と白衣の男は慌てて聞いた。

「今、眠り姫が動いた・・・」

「「っ？！！」」

二人はそちらに視線を向け数分見詰めたが、一行に動く気配の無い眠り姫を見て構えを解いた。

「・・・すまない、気のせいだったかもしれない」

そう言った９番目の男を二人は笑うことや、問いかける事はしなかった。

彼の心境は痛いほど解っているためである。

そう未だ眠り続けている少女は言わば爆弾と同じなのである。

―――脅えているが良い・・・そうやって・・・。

「まぁあとは任せるよ？」

「はい、明日より洗脳に重点を置いていきます」

「ぁあ、わかった・・・」

そう言うと、番号呼びされて居た二人の気配は消えた。

残ったのは白衣の男だけ。

「ふぅ・・・危ないねぇ～！俺たちの声は聞こえているんだろう？」

――――・・・。

「別に何も言わなくて良い。そして警戒もしなくて良い」

――――・・・？

「僕は君の味方だ」

どれくらいの時間が過ぎただろうか？

もう少しで会えるよ・・・灯馬・・・。

貴方は私に気がつけるかな？

ａｎｏｔｈｅｒ．００３（後書き）

章で言うなら、第一章はちょっと中途半端かもしれませんがここで終りです。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

act．017（前書き）

第二章スタート！！

act. 017

「ようこそ、ルミナス学園へ・・・私はこの学園の理事長、ミネラ・ウォーカーと申します。お二人を心よりご歓迎いたします」

学園のある一室に通され、入るやいなやミネラは自己紹介した。

「私は神咲灯馬と申します。そしてこちらは・・・」

「神咲弥彦と言います。よろしくお願いします！」

灯馬に続いて弥彦も元気一杯に挨拶をし、ミネラは少し微笑んだ。

「ふふ・・・元気がいいですね。それでは挨拶もここまでにして、本題に入りたいのですが宜しいでしょうか？」

「ええ、どうぞ。時間もありませんしね」

灯馬と弥彦が学園に到着したのは、本日の授業が開始されるチャイムが鳴ったのと同時で、そこから入り口の門番にお願いして中に入れてもらい、約２０分かけて学園長室と思われるここまで案内されたのだった。

重厚な作りの中にどこか冷たさを感じる部屋で、雫の部屋と似たような雰囲気を出していた。

案内を買って出てくれた門番の人はいつの間にか居なくなっており、部屋に残されたのは灯馬と弥彦、ミネラの三人だけであった。

ミネラが二人を備えられたソファーに座るよう促し、腰を落ち着かせたのを見計らって口を開いた。

「それではまずお二人がこれから向かう教室ですが、灯馬さんは総合学科で教鞭を振るっていただき、弥彦さんは魔法学科で基礎知識から学んで頂く・・・これで間違いはありませんね？」

「「はい」」

その返事を聞いて満足そうにミネラは一つ頷き、

「よろしい・・・では私はこの後用事がある為、失礼ですがここで退室させて頂きます」

と言い、立ち上がり何歩か二人から離れるように歩いた。

「本当に急いでいらっしゃる中、遅れてしまい申し訳ありません」

灯馬はそう言いつつ頭を下げた。

「いえいえ、お気になさらず。今、二人の教員がこちらへ向かっています。案内を予め頼んでありますのでその二人に付いて行って下さい。では・・・」

そう言うとミネラの影が彼女を取り囲むように黒く広がり、足からその影に沈んでいった。

「お二人とも今後の活躍を心より期待しています」

そう言って一礼をしつつ、最後には頭の天辺が影に飲まれるのと同時に、彼女を取り囲んでいた影は集束し、彼女は居なくなってしま

った。

その様子を逐一見ていた弥彦は慌てて灯馬に問いかけた。

「師匠・・・あの人はもしかして?!」

「ああ、ヴァンパイア族だな。しかも始祖クラス・・・いや、完全に始祖だな」

「はわわわ!!凄い人と会っちゃいましたね!!」

弥彦は歓喜とも畏怖とも取れる感情を体全体で表現していた。

今まで本でしか読んだ時がなかった伝説の存在がたった数分とは言え目の前に居て、しかも少しでも話してしまったという事が弥彦には十分インパクトがあったのだろう。

そんな弥彦を眺めていると、不意に扉を叩く音が聞こえた。

「「失礼致します」」

その一言と共に扉は開かれ、新たに入って来たのは二人の男女だった。

「どうやら学園長は既に出られたみたいですね」

そう最初に言ったのは、赤い衣服を身に纏った眼鏡をかけた女性だった。

「遅かったか・・・」

そして遅れて言ったのは、顔に無数の切り傷痕が目立つ、厳つい男性だった。

「仕方がありませんね・・・それでは遅くなりましたが、自己紹介をさせて頂きます。私はヴァリス・フィリングと申します。先日はうちの愚妹が失礼を致しました」

そう言うと彼女は深々と頭を下げた。

「え？愚妹って・・・」

「ノココは・・・いえ、ノココ・フィリングは私の妹です」

「え～～～～！？」

そこで驚きの叫びを上げたのは弥彦だった。

ａｃｔ．０１７（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

act. 018

「へぇ～言われて見ればどことなく雰囲気が似ている感じがするね」
とヴァリスの発言を素直に受け止め納得していた灯馬だった。
二人の様子を見てヴァリスはクイッと眼鏡を直し、隣に居る男の紹介に入った。
「ヨロシクお願いしますね。そしてこちらが・・・」
「お初にお目にかかります、バルト・アークスと申します」
その顔に無数の傷を持つ厳つい男はそう一歩前に出て名乗ったが、
「アークスって・・・」
灯馬の呟きに逸早く反応した。
「ええ・・・マリア、そしてアリサ・アークスは私の妹です」
その言葉を聞いてまた驚愕の叫びが木霊した。
「え～～～～？！」
もちろん、叫んだのは弥彦だった。

「それではお互いの自己紹介もそこそこに、生徒達をあまり待たせるわけにも行きませんので、そろそろお二人の教室にご案内したいのですが宜しいでしょうか？」

お互いに簡易的な自己紹介を終え、改めてそう言ったのはヴァリスだった。

「はい、お願いします」

灯馬は一つ返事をして、隣で未だに落ち着かない弥彦に「ほら、行くぞ」と催促し、立ち上がった。

「それでは、灯馬さんはバルト教務とご一緒にお願い致しますね？弥彦君は私と一緒にお願いします」

「「はい」」

そして灯馬は弥彦に向き直り、

「弥彦、ちゃんとサボらず勉強しろよ？」

と言ったが弥彦は意気揚揚と、

「もちろんです！師匠も手を抜かずに頑張ってくださいね！！」

「ああ・・・」

そう二人は笑い合い、手を振り別れたのであった。

「それでは灯馬君、そちらの魔法陣から行こうか」
弥彦とヴァリスが部屋から退室したのを確認してバルトが部屋の隅にあった魔法陣に指を向けて促した。
「転移魔法陣ですか」
「ああ、ただでさえ広い学園だからな、色々な場所に魔法陣が設置されている。一応、初めて魔法陣を使う者の為に学園内、全ての場所に案内板が建てられているはずだからそれを見て使うと良い。使い方は解るか？」
「ええ、大丈夫です。ではお先に行きますね」
「そうか・・・だったら転移したらその場所で待っていてくれ」
「了解！」
そう言うと灯馬は描かれた魔法陣の上に乗り「ブーン・・・」という音と共に姿が消えた。
「流石にちゃんと扱えるか・・・」
転移魔法陣を扱うには、行き先を頭に浮かべ多少の魔力を魔法陣に流してやれば成功するのだが、たまに不器用な生徒が居て魔力が少なすぎたり、魔力を多く流しすぎたりする為に、転移できない人が居たりする。
故に、まだ未熟と判断されてた弥彦は転移魔法陣を使わず徒歩で教

室へと向かったのであった。

だが、灯馬に関しては自分の心配が杞憂だったらしく、バルトは軽く苦笑の表情を浮かべ魔法陣の上に乗り姿を消したのであった。

ａｃｔ．０１８（後書き）

肺気胸にかかり再入院してました。更新が遅れて申し訳ありません。

今後は、灯馬をメインとして物語を書いていきます。

弥彦の話も書くつもりですが、割合的に約８：２と弥彦の話は少なめです。。。

要望があれば割合が変わってくるかもしれませんがｗ

ご意見ご感想お待ちしております。

act. 019

「静粛に！！」

バルトが教室に入ってなお生徒の喧騒が静まらない中、ドスの利いた声を出して叫んだ。

「――――」

「一回目の授業から遅れて申し訳ない。突然だが、お前達に知らせなければいけない事がある」

何事だと小声で聞こえてきたが気にする様子もなくバルトは言葉を続けた。

「お前達が卒業するにあたり、この講堂では最後のカリキュラムを受けてもらうわけだが、そこでお前達の教官を新しく連れてきた。実力は保障しよう！最後までしっかり聞き、みんな卒業してもらいたい・・・以上だ！」

そう言うとバルトは灯馬に場所を譲り、教室の隅へ移動していった。

灯馬はハードルを上げるなァ～・・・と苦笑を浮かべたが、気を取り直してこれから自分が教える生徒達に向き直った。

生徒が椅子に座りこちらに目を向ける中、その一つにどこか悔しそうにこちらを睨みつけるルフィル・ケープナの姿もあった。

「えーっと、皆さん初めまして！神咲灯馬と言います。皆さんにと

っては初めてこの学園に来てなんでお前が？おまえ誰？！と思うかもしれませんが、そこら辺は今後の授業で追々悟っていってください。他に何も言う事は無いんですが・・・何か質問はありますか？」

灯馬がそう言うと一人の女子生徒がスッと手を挙げてきた。

「・・・君は？」

という灯馬の問いかけに、その女子生徒は立ち上がり

「ユラ・シシティと言います。一つ質問を宜しいでしょうか？」

「はい、何でしょう？」

「今、学園でこの噂話で持ちきりになっているんですが、先生がルフィル・ケープナを瞬殺したというのは本当でしょうか？」

瞬殺とは物騒な・・・と思いながら、灯馬は苦渋した。

チラリとルフィルの方に視線を向けると、怒り心頭らしく顔を真っ赤に質問した女子生徒と灯馬を交互に睨みつけてた。

「えーっと、そこら辺はノーコメントで。私の実力も追々授業で悟ってください」

そこで話を打ち切る為に、灯馬は他の生徒に質問を促した。

それからしばらくして大方の質問が出尽くしたところで灯馬は本題

に入ろうとしたが、一人の生徒が手を上げた事に気が付き灯馬は「どうぞ」と一声かけて生徒に促した。

「それで私達は何の授業をやるのでしょうか？」

「ああ、それを今言おうとしていました」

と灯馬は生徒に返答して一呼吸置き言葉を続けた。

「私は皆さんの実力は知りません。ましてやこの学園で卒業資格を得ている貴方達に今更、基礎段階の事を教えても意味はありそうとも思えませんし・・・どうでしょう、一度私と皆さんとで戦ってみませんか？そして私の基準の中でこの生徒は大丈夫だ！と思ったらその人はその場で卒業していただきます」

そう笑顔で平然と語る灯馬を見て、生徒達は一斉にざわめき立った。

しかし灯馬は気にする様子もなく更に言葉を続けた。

「この教室に居る全員が騎士や冒険者と言ったいずれ戦わざるを得ない職業につく者だけと認識しています。ですので、場合によってはより上を目指すための戦いを教えようかと思っていますがいかがでしょう？」

ルフィル・ケープナを瞬殺したという噂がより際立っていたせいか、ほとんどが「よし！」と気合を入れなおし、眼をギラギラとさせ灯馬に挑発的な視線を送る者も居た。

しかし、どれだけの生徒が気付いただろうか。

灯馬の基準がいかに厳しいものだという事に・・・。

その中で一番渋い顔を浮かべたのが、生徒ではなく同じ教務のバルトだというのは皮肉なものであった。

act. 019（後書き）

お久しぶりです。長い間放置して申し訳ありませんでした。

またこれから話を進めて行こうかと思います。

今後ともよろしくお願いします。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0330o/

奇跡への軌跡

2011年2月11日18時45分発行